

平成 28 年度

学位論文

幼児の音感を育む音楽教育に関する研究
—「聴く」ことに着目して—

兵庫教育大学 学校教育研究科
教育内容・方法開発専攻
文化表現系芸術コース芸術系教育分野
学籍番号 M15196F
名前 前川典子

凡例

1. 『 』 文献名を示す場合に用いる。
2. 「 」 引用および重要な語句，脚注における論文タイトルを表す。
3. () 本文中の補足事項を示す場合に用いる。
4. 【 】 見出しを示す場合に用いる。
5. < > 第3章において昔遊びのタイトルを表す。
6. 人物名においては，2度目の記述から原則として姓のみを記す。

目次

はじめに	2
第1章 保育現場での音楽活動の現状と問題	3
第1節 保育現場での音楽活動の現状	3
第2節 事前アンケート結果による現状からの考察	13
第3節 聴く耳を育てる音楽教育の実践について	17
第2章 保育現場での授業実践と結果	19
第1節 身近にある音を聴く実践	19
第2節 音の違いと音高を感じる実践	30
第3節 音を作り出し探し出す実践	35
第3章 今後の保育現場での音楽活動への応用	43
第1節 授業実践を踏まえた上での音楽活動報告	43
第2節 今後の音楽活動への応用	46
まとめ	52
巻末資料	54
参考・引用文献(五十音順)	60
謝辞	65

はじめに

本論文は、保育現場での音楽活動を、幼児の音感を育むことによって充実させることはできないかということを、授業実践を通して研究したものである。

筆者が音楽講師として保育園で指導して 10 年が経つ。最初の頃は保育園の音楽活動に関して、特に疑問に思うこともなく指導をしていた。しかしある時、歌うことが嫌いだというクラスに出会った。音楽活動に対して否定的な行動をとるわけではなかったのだが、確かにそのクラスを担当していた保育士の先生は、音楽が苦手そうであったし、子どもたちも歌うことも楽器を演奏することも楽しくなさそうだった。

筆者はどうにかして音楽の楽しさを先生にも子どもたちにも理解して欲しいと考え、様々な工夫や方法を試みた。それによって、子どもたちは積極的に音楽を楽しんでくれるようになったが、先生に関しては今までの経験からの影響もあるのか、苦手意識を払拭することは難しかったようである。

この体験から、難解なものではなく、保育士の先生の負担にもならず、子どもも保育士の先生自身も楽しめるような音楽活動はないのであろうか、またそういった音楽活動により、歌をうたったり、楽器を演奏したりすることがより良いものになるように繋がる音楽活動であれば、なお一層価値があるものになるのではないかと考えるようになった。

そこで音楽の素材である「音」に興味を持つことにより、音楽へも興味が湧き、また音に対して鋭敏な感覚と豊かな感性を養うことにより、歌唱や器楽など演奏にも役立ち、楽しめるようになるのではないかと考えた。

以上のことから、「音を聴く」ということに注目し、保育者や幼児にとって効果的な音楽活動を探っていきたいと思う。

第1章 保育現場での音楽活動の現状と問題

第1節 保育現場での音楽活動の現状

幼児教育において音楽とはいったいどのような立ち位置で扱われているのであろうか。筆者が幼児教育の現場で音楽指導を始めた時、保育者の音楽へ対する態度や考え方、幼児の音楽活動に関しての捉え方が、自身のものとは異なるのではないかと少し違和感を覚えることがあった。同じ音楽を指導しているはずなのだが、その違いは一体どこから来るのであろうか。単に、専門と専門外、または経験の違いと放置しておいてよいのであろうか。

幼児教育、音楽というキーワードで文献を探すと、様々な知見を得ることができた。高橋好子は、「幼児の生活における音楽表現活動は、音楽のさまざまな要素や種々の分野が組み合わせられ、さらに他の領域(言葉、人間関係、環境等)とも相互に深い関係性を持ちながら行われることはいうまでもない。」¹と述べている。また、若山剛らによる研究論文では、「歌を口ずさむ、身体でリズムをとってあげることで、情緒が安定し、コミュニケーションのきっかけとなるなど、それが心の安定の大きな影響を与えていることは誰もが実感している事であろう。その意味でも、言葉の発達と音楽、そこには発達上、多角的な相互関係が伺えるのではないかということが考察できる。」²と論じている。そして前述の高橋好子の著書の中で、具体的に乳幼児の音楽指導にあたって配慮すべき点として「(1)聴覚系の年齢発達をよく認識する(2)知能の発育、運動器官(骨格、筋肉、神経など)の発育に聴覚を介した音感教育の必要(3)乳幼児教育現場および家庭における音楽環境づくりと、音感教育の時期、年令に応じた適切な指導内容の選定(4)発声・発語についても発声器官、構音器官の構造は親に似ることが多いし、発声、発語機能も生活環境に影響される点が多い。したがって幼児期から学童期にかけ、年令の変化と声域の変化を考慮した児童の発声、発語教育は重要である。」³と音楽活動と子どもの身心の発達のバランスを考慮するよう、いくつかの注意を挙げている。

一方、武田道子は、「子どもの生活は遊び、遊びながら学んでいくと言われる。歌う事も子どもにとっては、遊びの一つである。より教育的な意図のもとに、歌遊びが構成されるなら、音楽的に幸わせたに包まれた子供に育っていくだろう。」⁴と、子どもの遊びの延長線上に音楽を楽しむことへの導きの大切さを論じている。もちろん、前述の高橋好子も「幼

¹ 高橋好子、1992『音楽をたのしむ子どもたち』(株)文化書房博文社、87頁

² 若山剛ほか、1998「乳幼児期発達の諸相における相互性について」、『日本保育学会大会研究論文集』(51)、518頁

³ 高橋好子、上掲、66頁

⁴ 武田道子、1979「幼児の歌唱指導」、『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』(11)、130頁

稚園、保育園における音楽表現活動は、歌をうたったり、楽器の演奏をしたり、音楽をきいて身体を動かしたりすることによって子どもたちに音楽の美しさ、楽しさを十分に味わってもらい、音楽のよろこびを心や身体で感じてもらうことを目的とする。さらにいうならば、音楽によって子ども自身の感性が引き出され、内在する様々な感情や心の動きが自発的に表現活動化されることがのぞましい。」⁵と論じていて、音楽を通して子ども自身の心身の成長を図るという捉え方である。

以上のことから考えると、幼児教育からみた音楽の立場というのは、言葉の発達を促し、コミュニケーションや遊びの一つとして、またそれらの延長として捉えられているように考えられる。つまり、幼児教育においては音楽を学ぶというよりは、どちらかと言えば心身の発達の手段の一つとして、他の表現の内容とバランスを取りながら音楽を用いるという考え方であると言えるのではないか。

では、音楽教育の分野において幼児に対する音楽教育とはどのように考えられているのであろうか。もちろん、幼児に歌詞の深い意味や作曲家の思いを汲むというような高度なものを要求するというのは無理なことで、そのようなことを子どもたちに強いるのは馬鹿げている。とはいえ、子どもなりに言葉で表せないものを音楽から感じ取ることができるようにするためには、適切な導きが必要なのではないのであろうか。また、そういったものを受け止めることのできる「感性」を育てることが必要なのではなかろうか。

ここではその感性を磨くためにどのような実践が行われているかということを中心に考察してみたい。

まず、音楽教育産業においてはどのようなアプローチが採られているのであろうか。幼児教育部門で幅広い支持を受けているヤマハ音楽教室の考え方を参考に挙げてみることにする。吉井妙子は、ヤマハ音楽教室の原点に関して、「上手に弾ける人から、音楽を楽しむ人へ。この発想の転換が、ヤマハ音楽教室の原点になった。」⁶と分析している。そして、「子供がさまざまな形で音楽に触れ、その楽しさや心地よさを味わいながら、自然に音感が磨かれるという方法を編み出そうとした。具体的に言うなら、まず曲を聴き、旋律や歌詞をドレミで歌い、次に歌ったように鍵盤を弾きながら確かめ、それを楽譜で確認する。そして最終的には、自ら曲を作り、即興演奏ができるようにする。つまり「きく」「うたう」「ひく」「よむ」「つくる」という5つの要素を組み込んだオリジナルの発想である。」⁷とし、ヤマハ幼児音楽教育が楽しみながら音感を磨き、基礎的音楽能力を磨くシステムを考

⁵ 高橋好子、上掲、87頁

⁶ 吉井妙子、2015『音楽は心と脳を育てていた』日経BP社、20頁

⁷ 吉井妙子、同上、21頁

案していることに注目している。また同著の中で、脳科学者の古屋晋一は、「また、耳が鍛えられると、言語習得能力が高まり、他人の感情を言葉の抑揚で判断することができる。言葉を司る脳の言語野は音楽情報も処理していることから、適期音楽教育を受けた子供は言語野も鍛えられている。言葉と音楽にはピッチ、リズム、文法など数多くの共通点があるからだ。」⁸と音楽によって耳を鍛えることにより、様々な能力が鍛えられるとしている。

一方、音楽分野からみた幼児教育の研究でも、玉置温子は、「音楽的素質とは、特別なものではなく、聴覚が正常であり、感受力があり、声が出せて、手足や体が動かせるということである。こうしたごくありふれた普通のことが、音楽的環境の中におかれて培われてゆくとき、音楽的才能と呼ばれるものになるのである。音楽的才能が遺伝的なものでなく、環境的なものであるといわれるのもこの理由によるのである。したがって、この時期の音楽的環境作りは、非常に重要な意味をもつものとなってくるのである。乳幼児はこの環境の中で、自然発生的に歌ったり、踊ったり、奏したり、きいたりして、音楽のたのしさを味わいつつ、その能力を伸してゆくのである。」⁹と音楽的な能力を伸ばすための環境について触れている。

同様に村山和が音感と感受性について以下のように述べている。「音感が良ければ音楽的な感受性が鋭いか？音楽的感受性が鋭ければ音感の良いか？前者の場合には、音感が良いということは耳の機能が敏感であることで、音楽的感受性が必ずしも鋭いかどうかは断定できない。後者は、音楽的感受性の鋭い子供は、音楽の中から何かしら感動を味わうことを知っている、心にふれる敏感な感受性をもっているのであるから、音感が全然だめだということはない、非常に出来がよいわけではなくても、普通に順調に音感についていくものだと思われる。そして、音感や演奏技術の面より、むしろ、音楽的感受性の方が、音楽を学ぶために必要とさえいえるのである。」¹⁰と。現在保有している音楽に関係する能力を伸ばすには環境が大切であり、音感だけが良くても、感受性だけが優れていても、声や身体を操る能力だけが長けていてもだめであるということである。

以上のことから考えると、音楽分野からみた幼児の音楽教育の立場としては、音楽活動を行うことで子どもたちの脳の発達、心身の発達を助けることはもちろんのこと、コミュニケーションや遊びからもう一步踏み込み、音楽を楽しみ、音楽に関する能力を総合的に

⁸ 吉井妙子，上掲，140 頁

⁹ 玉置温子，1968「保育音楽におけるソルフェージュの役割」、『社会問題研究 18』(1)，42 頁

¹⁰ 村山 和，1969「幼児の音楽教育、特に音感教育について」、『札幌大谷短期大学紀要』(5)，53 頁

高めるということを目的としているのではないであろうか。幼児教育からみた音楽は「手段」として捉えられており、音楽教育分野からみた幼児部門の教育においても、音楽はもちろん「目的」として捉えられているのである。確かに、立場が違えば捉え方が変わるというのは当たり前の話だが、筆者は後者の考え方が不可欠なのではないかと考える。

そこでまず、筆者と同じように非常勤で幼稚園や保育園に指導に入っている音楽専門教育者 9 名に対して、指導するにあたり、日頃どのようなことを園の常勤教員や保育士にお願いしているのかを調査¹¹してみた。その結果¹²、音楽を嫌いにならないように「音楽を楽しむ」こと、最近の曲、昔の曲のどちらにも偏らないよう「選曲に気をつける」ことを園にお願いしている指導者がそれぞれ 3 名、そして、子どもが自ら進んで活動し、考えるように「自主性」に関して園にお願いしている指導者が 2 名、「ピアノの伴奏の向上」をお願いしている指導者が 2 名であった。子どもたちが好きな現代の曲と、親子で楽しめ、日本の良さがわかるような昔ながらの曲などを取り混ぜること、自主性を養うことで、一人でも音楽を楽しむことができること、子どもたちが憧れ、音楽の美しさを理解できるようなピアノの伴奏であってほしいこと、などの願いが込められている。

これらはいずれも保育現場での音楽教育において大切にされるべきポイントであると考えられるが、このことが十分に検討され、実行されているかという点でもないのが現状である。1970 年に服部公一が『あなたとくらしと音楽と』の著書の中で、幼児に対する音楽教育のあり方について、「第一、考えてもごらん下さい。子どもたちよりも実力のない先生が教える音楽教育なんて、私は全く信じられません。」¹³と既に大きな問題として指摘している。また幼児教育の学会や保育所養成大学などにおいても様々な研究と議論がなされてきている。それらは幼児の音楽教育や音楽指導に関する研究、幼児の歌唱指導についての研究、幼稚園・保育園におけるピアノ伴奏法や弾き歌いに関する現状と課題に関する研究などである。しかし筆者が現場をみるかぎり、保育現場での音楽教育は十全なものになっていない。40 年も前に服部公一が指摘している上に、幼児教育における音楽活動に対して多くの議論がなされているにもかかわらず、今現在、未だに解決に至らず問題が膠着状態であるということは、別の視点からのアプローチが必要なのではないだろうか。

例えば、筆者のような音楽専門教育者が園に入って音楽を教える。当然のことながら、指導という行為であるため、技術的なこと音楽的なことに関して、子どもたちにとっては少し難しいと感じられるような課題を与える。もちろん、子どもたちが音楽を楽しめるよ

¹¹ 専門指導者アンケート 巻末資料 1 参照

¹² 専門指導者アンケート結果 巻末資料 2 参照

¹³ 服部公一、1970『あなたとくらしと音楽と』日本放送出版協会、25 頁

うな配慮の上での指導を心掛けている。そして子どもたちが、自身のできないことを楽しみながら達成することによって、音楽的に、また技術的にも成長するのだと思うのだが、ごくたまに課題を達成することのみが第一の目的になってしまい、音楽を楽しむということがなおざりになってしまうことがある。この場合、その音楽活動はもはや教育としての音楽活動ではなくなり、いわゆる「芸を仕込む」、ただの訓練になってしまっているのである。かといって、音楽を楽しむことだけに重きを置いてしまい、平易な課題ばかりになってしまうと、音楽は子どもたちにとって非常に退屈な学びの少ないものになってしまう。以上のことをバランス良く指導していくためには知識だけでなく、経験も必要となり、なかなか難しいことではないだろうか。

その上、昨今の少子化の影響で、生き残りを賭けて音楽教育にオリジナリティを持たせ、それを「売り」にしている幼稚園、保育園が存在する。そのため保育現場で行われる音楽活動は多彩を極めている。通常の歌唱指導にとどまらず、様々な楽器指導、例えば打楽器の合奏や、園によっては特別に指導者も招聘して鼓笛隊に取り組んでみたり、ヴァイオリンやピアノの演奏までにも力を入れたりしている。その他、リトミックやオルフ音楽教育、わらべ歌に特化した歌唱教育なども行っている園もあるという。このような多様な音楽活動に対応するのは、専門的な音楽教育を受けた者でさえ困難なのではないだろうか。

事実、筆者自身も鼓笛隊での演奏や指導の経験がないにも関わらず、鼓笛隊を指導しなければいけない場面に遭遇した。解決するために経験者から指導法などを聴取し、様々な動画を参考にして乗り切った記憶がある。

では、実際にそのような活動を支えている保育者の音楽指導のスキルは充分であるのだろうか。日々の様々な指導に忙しい上に、幼児期の音楽教育は言葉の発達を促し、コミュニケーションや遊びの一つとして、また延長として捉えるように学んできた保育者に、専門的な指導法が求められる活動を要求し、子どもが音楽嫌いにならないように指導する上で質の良いものを要求するのは、甚だ酷な話なのではないかと思うのは、筆者だけなのであろうか。もっと保育者と子どもたちが無理のないように音楽を楽しみ、歌唱や楽器演奏に触れ、音楽というものを楽しみながら体感することができないものであろうか。保育士も子どもたちも、音楽というものを難しく考えずに、音楽に対する感受性を養い、さらなる興味をもつように音楽を学ぶには、どのように子どもたちを導けばよいのだろうか。

この件について調査している時、様々な資料の中で「音感」や「聴覚」というキーワードを見かけた。これらを扱った内容の研究では、音楽の分野から幼児に対する音楽教育というものを捉える際に、音楽を学ぶための必要なスキルとして「音に関心を持つこと」、「耳

を鍛えること」が重要視されていることがわかる。またその上で音楽を楽しめる環境というものも必要なのではないだろうか。

それでは、音感や聴覚を扱った研究を始める前に、保育者たちは自身が行っている音楽指導に関して、実際にはどのように感じ、どのような問題を抱えているのであろうか。いくつかの幼稚園、保育園の保育者をお願いし、アンケート¹⁴を実施した。

【調査の目的】

保育者が日々の音楽活動の中で抱えている問題の把握。

【調査対象】

奈良市の私立幼稚園 T 幼稚園(9 名), S 幼稚園(17 名), 私立保育園 S 保育園(5 名), 京都府の私立幼稚園 H 幼稚園(15 名), 香芝市の市立幼稚園 S 幼稚園(4 名), 和歌山市の私立保育園 T 保育園(14 名), 東大阪市の私立幼稚園 G 幼稚園(15 名)の合計 79 名の保育者。

【調査期間】

2015 年 7 月 15 日～2015 年 9 月 10 日

【調査方法】

こちらの提示した選択肢を選んでもらい、養成校と現場との違いを自由記述で記入してもらう。

¹⁴ 保育音楽指導の実態調査アンケート，巻末資料 3 参照

【結果】＜選択肢の回答＞複数回答可

	苦手な分野						解決策として考えられること				
	歌唱指導	キーボード演奏	楽器指導	リトミック	オルフ音楽	特になし	練習時間を増	知識を増やす	読譜力向上	音楽苦手	わからない
帝塚山幼	6	4	6				4	7	2	2	
志都美幼	2		1	1	1		1	3			
光が丘幼	11	5	9	2			10	13	1	3	
西大寺幼	13	10	6		1	1	14	10		2	
西大寺保	2		5					5			1
源氏ヶ丘幼	8	9	6	1			9	7	2		2
太陽保	4	4	8	2		4	5	9	3	1	
計	46	32	41	6	2	5	43	54	8	8	3
パーセント	58%	41%	52%	8%	3%	6%	54%	68%	10%	10%	4%

＜自由記述＞

自分流に簡単な伴奏にしている
歌唱指導では歌詞の意味を理解して気持ちを入れて歌えるようにする伝え方に苦勞する。合奏でパートが分かれるときにそれぞれのリズムを教えるのが個人差もあり難しい。知識として残すだけでなく、体で感じて心が弾むような楽しい音楽の時間にしたいのですが難しい。
大学のピアノの指導が授業であり、とにかく伴奏は止まらないで続けてやりきるようにということが耳に残っています。下手でもメロディーだけでも続ける、最低ラインですが大事だと思いました。よく歌われる曲も何曲か練習し暗譜で弾けるようにしたので楽でした。
ピアノの能力以外に子どもの歌に合わせるのが難しい。
学校は講義としては聞いていたが、実際の現場では一人一人に合わせたやり方があり、複数の人数をまとめることは講義だけでは学べないことがありました。
子どもたちに合わせてピアノを弾くことが難しく感じる。
子どもたちに歌を教えるときにどうすれば想いが深まるか難しいです。実際に子どもたちに歌を教えていくこと、伝え方はその場で変化させていかなければならないことを実感しています。ただ大学で弾き歌いのテストに合格すると現場で保育しているときの意識は違うと思いました。
短大では、ソナチネなどの練習曲が課題でテストが多かったのですが、技術にはなったが実際働くとき子どもの曲の弾き歌いがほとんどなので「弾きながら歌える」ことが必要となって慣れるまで大変だと感じました。
暗譜しないといけないこと、歌いながら弾かないといけないこと、歌って弾きながら子供たちの様子を見て歌うポイントを伝えないといけないこと等、学校では練習しなかったことが現場では必要でした。

短大では弾き歌いのテストがあったりしましたが、現場での現状を知る機会がなく想像以上に大変でした。鍵盤を見ないで弾かないといけないということに慣れるまで苦労しました。簡易伴奏が載っている市販楽譜は多く、手に入りやすいので和音などの豪華な伴奏のつけ方を学びたかったように思います。
歌いながら、子どもを見ながらピアノを弾くということを学校ではしてこなかったので慣れるまでは難しかった
養成校では、楽譜通りに間違えずに弾くことが目標でしたが、現場では子供が歌いやすい様にメロディー(両手伴奏ではなく、右手メロディー左手伴奏等)を弾いたり、子どもたちが苦手なところを歌いやすいように弾いたり(強弱をつけたり、掛け声を掛けたり等)必ずしも楽譜通りに弾けばよいのではなく、子どもの様子に応じて弾き方を変えていかなくてはいけないところです。
子どもの方を向きながら弾くのが難しいです
ピアノのレッスンは十分ありましたが、他の色々な楽器(保育で使う、指導する楽器マリンバ・太鼓・ハーモニカ・シンバルなど)に触れる機会がなく現場に出て戸惑いました。
養成校で学んだことはどれも現場で必要とされることばかりでしたが、現場に出たときに必要とされる、大人数の子どもに合わせたピアノ伴奏や歌唱指導などの技術は学校ではなかなか身に付けることができなかったように感じます。
大きく違うことはないが学校では譜面を見て弾くだけの伴奏が、現場では子どもの様子を見、言葉掛けをしながら弾くので、間違えることが多いです。その曲の良さを子供たちに伝えきれず、反省することも多いので、練習の必要性を感じるとともに、子どもたちが歌いやすくするためにも正確に弾くことに必死にならず、時には伴奏を工夫し、楽しく一緒に歌えることが大切だと感じます。
自分が弾いている伴奏に合わせて、子ども(人)が歌うという経験がなかったので戸惑いました。
初見で弾くことができない。養成校でも初見を経験できれば良かった。
正確に楽譜を弾くことよりも、止まらずに楽しく歌って弾くことが大切だと幼稚園で学びました。自分が弾けるレベルに楽譜をアレンジしてもらい、弾き方を教えてもらうなど、上手な同僚の先生に教えてもらいました。伴奏よりメロディー+左手の伴奏でどれだけ華やかになるか教えてもらえたら、幼い子供ほど歌の指導で役に立つのではと思います。
弾き歌いのテストをしたが、今はプラス子どもの様子も見ているのでただ楽譜通り弾けてもあまり意味がないなと感じた。養成校で学ぶより現場で学ぶことがはるかに多いことも分かった。
特に違いはない。学校よりも就職してから弾く機会が増え、練習することも多くなりました。楽譜を見てすぐには難しいものだと弾けませんが、子どもに下ろすまでには練習をたくさんします。養成校でしっかりやっていたらと後悔しています。
乳児担任しかしたことなく、音楽指導の方法がその年齢にあっているかわからない。楽しく意欲を持って取り組めるようにしているが、発声の仕方等乳児にあった指導法も知りたい

<p>養成校では楽器に触れる機会が少なく、正しい演奏指導の仕方(楽器の持ち方等の基礎)などを学べなかった。また声楽も子供に指導するときには…を学ばず自分が歌うことばかりであったので、今考えると子ども第一で、もっと音楽面でも学びたかった。</p>
<p>学校で様々な童謡や楽器を教えてもらったが、子供たちに対しての指導方法を教えてもらわなかったように思う。現場での経験を通して学んでいくことも多いが、音楽指導の知識を教えてもらえればありがたいと思った。</p>
<p>養成校卒ではないので、経験と独自の練習で乗り越え、ただひたすら練習あるのみだった。子供たちと一緒に歌うために、ある程度の練習+弾いているうちにマスターするという感じ。行事の伴奏は曲と奏者のスキルが合わず、難しさを感じてきた。生演奏も良さもあって悪いとは思わないが、養成校ではそこまで把握されていないのではないかな？</p>
<p>現場で必要とされることによって知ることのできたものがあつた。(鼓笛)</p>
<p>学校においても、伴奏を簡単にして弾き歌いができるようにと指導されたが、進度が早くついていけなかった。</p>
<p>学校では、弾き歌いの練習を行い、より多くの曲を弾けるようにしていたが、現場では子供が楽しく楽器に触れられるように、歌えるようにするための「工夫」が必要だった。</p>
<p>簡単な伴奏であっても、音を間違えずにきちんとした音を聞かせ、歌唱指導をすることが大切だと思った。</p>
<p>音の高低差の指導が難しいと感じた。行事に合わせた選曲の仕方、例えば卒園式の曲など、どんな感じの曲を歌えばよいのか戸惑った。</p>
<p>幼児に歌唱指導をするとき、メロディーをきちんと歌えるようにと思い、どうしても右手を強く弾いてしまうが、音の美しさ、音楽の楽しさを純粋に理解できる幼児だからこそ指導する側がメロディーだけにとらわれずに音の美しさを楽しめるように指導していく必要があるんだなと思いました。大学で今の子どもたちは高音が出にくくなっていると聞き、現場でもそう感じることもある。何か解決策はあるかな？</p>
<p>短大で学んだすべてのことは保育現場で生かされることばかりであったと保育実践をして初めて実感しました。学生時代の時間のある時にピアノやソルフェージュの技術を磨いておけばよかったと反省です。ピアノにおいては楽譜通りに弾くことが大切だと思います。自己流にアレンジしてしまうと曲本来の表現が欠けてしまうと思います。しかし初見で弾けるような楽譜であると有難い。また簡易伴奏でも華やかに聞こえるテクニックを覚えたい。</p>

アンケート結果を見ると、苦手分野では歌唱指導が 58%と一番多く、次いで器楽指導が 52%、キーボード演奏(伴奏)が 41%となり、その他のリトミック、オルフ音楽教育などはどちらも一桁で、それほど苦手意識がない、もしくは園で取り組んでいないため選択していないのではないかという結果であった。また、その苦手分野を克服するためにどのような解決方法を取ればよいと考えられるかという質問に対しては、知識を増やすことが 68%と一番多く、次いで練習時間を増やすが 54%、読譜力の向上が 10%となり、音楽が苦手という選択肢とわからないという選択肢、すなわち解決策が思いつかないと考えられる人が、合わせて 14%と 7 人に 1 人の割合で存在していた。また、音楽指導を行うに当たって、養成校で学んだことと現場で必要とされたことに違いがありましたかという質問に対する自由記述に関しては、子どもの方を向き(鍵盤を見ずに)子どもに合わせた伴奏をすることが難しい、伴奏で音楽を盛り上げたり音楽の内容や楽しさを伝えることが難しい、という意見のほか、様々な楽器に対しての知識がないためその知識を増やすこと、また今までは自身が指導を受ける方だったが、子どもに指導を行う側にたった時に指導法がわからない、という意見が多くみられた。

第2節 事前アンケート結果による現状からの考察

保育者が日々の音楽活動の中で抱えている問題を把握するために行った事前アンケートの結果は、こちらの予想していたものとかかなりかけ離れていたことに驚いた。当初、音楽活動に苦手意識のある保育者は、演奏実技(キーボード演奏)に苦手意識があるのではないだろうかと考えていたためである。もちろん、そのような保育者が全くいないわけではなく4割存在するのであるが、それよりも音楽を指導することに不安を覚えている保育者が6割を占め、また7割の保育者たちは音楽の知識の必要性を感じている現状をうかがい知ることができた。このことから、実際に幼児教育において音楽活動の現場に求められていることは、音楽指導をするにあたっての知識がないということに対する不安を取り除くこと、そして10%存在する音楽の嫌いな保育者に対しての対策を講じることなのではないかと言えるのではないかな。

しかしながら、十分な音楽の知識を持つだけで音楽指導ができるのであろうか。筆者はそれだけでは不十分なのではないかと考える。なぜなら筆者自身もそうであるが、音楽の知識が十分であっても、それを表現できるだけの語彙力と、様々な面から、楽曲や演奏実技にアプローチできる柔軟性、それを実際に音にするだけの実技力が必要だと考えるからである。

実際に自身が実践している指導を思い返してみると、まず生徒が演奏している姿、歌っている姿を観察しながら、「音を聴いて」いる。そして生徒が演奏している楽曲を分析し、その楽譜から筆者や生徒が読み取った「良い演奏」と考えられる理想の音楽や音を頭に描き(楽曲の理解力)、生徒の「音を聴く」ことによって少しでもそれに近づけるために、生徒の演奏している音と、筆者、または生徒が考える理想の音の差異を改善すること、その改善のために必要な演奏技術や音楽的表現方法(楽曲やテクニックへのアプローチ力)を的確に生徒に伝えている(語彙力)と言えるし、そのような実践を心掛けている。しかしながら、そのような能力を短期間で身につけることは困難であるため、もっと根本的なところに立ち返ることが必要なのではないだろうか。

また、音楽教育家の北村智恵が、ピアノ指導の観点より以下のように述べている。「自分の音をよく聴くこと——音楽する人間の基本的な課題です。音楽(音を楽しむと書く)するためにピアノを習い始めた人間に対して、音の楽しみ方(=「音」の聴き方)つまり、音を聴くための指導をしなくて一体何を教えるというのでしょうか。時間はかかっても一番にしなければならない大切なファクターです。」¹⁵ そして、進藤務子は「演奏することに限定せ

¹⁵ 北村音彦ほか、1996『音の感性を育てる 聴能形成の理論と実際』音楽之友社、173頁

ず、他者の発信する音楽と一体化して触れ合うことができるようになる力。受け取る力。それを核心を的確に掴んで共有し、自分の中で、さらに創造性の原点として自ら発信する力。子どもの内部に宿っている情操の灯火は、人とのかかわり、良い音楽との調和の中に身をおくことで、力強い光となって、人生をより一層豊かなものとしてくれることだろう。」¹⁶と言っている。他者の発信する音楽と一体化して触れ合うことができる力、そして受け取る力とは、他者の「音を聴いて」、他者の音楽を「感じとる力」であると考えられるのではないか。まずはそういった力を育み、その力を使って音楽を創造する力に繋がるというのである。

以上のことから、音楽は全ての科目の中で「聴く」ということが何よりも重要視される科目であると言えることができるのではないだろうか。演奏するにしても、指導するにしても「音を聴く」という行為が無視されることはない。ましてや音が聴こえなければ、音楽の楽しさを享受することは残念ながら不可能なのである。音程の違い、微かな音のニュアンスの差異などを聴き取り、感じる事が音楽にとって大切なのである。また、それが音楽の楽しさだとも言えることができる。ということは、豊富な知識を持つことも大事であるが、もっと「音を聴く」ということに真摯に向き合い、聴き手の音に対する感性を高めることが、音楽には大切なことであると言えるのではなかろうか。子どもなりに難しい音楽的内容はわからなくても、その演奏は聴いていて心地よい、心地よくない、楽しい、楽しくないなどの判断ができ、さらにすすんでその理由がなぜなのかを自身で理解できるようになることが音楽を学ぶことには求められている。

では、実際に音楽を「聴く」ということは、どのように考えればよいのであろうか。高野茂は、次のように述べている。「元来聴覚は、客観的で正確な情報伝達には向いていないといえる。そのかわり、音は人間の感情と深く結び付いている。記録された過去の音は、その当時の自分の心の状態をありありと思い出させてくれる。」¹⁷ このように「音を聴く」という体験は、その音を聴いた時の状況、感情、体験と深く結び付いているという。ただ単に音を認識することが聴くことではなく、聴いた時の環境をも含めて「聴いている」というのである。このことから、音楽を享受する「環境」は非常に重要であることがわかる。また、田原昌子はフィンランドの音楽科教育の視察で感じた彼の地での音楽教育について、「まず第1点目として、「聴く」ことが、フィンランドに学ぶ最も重要な音楽教育の

¹⁶ 進藤務子、2012「心をはぐくむ幼児音楽教育―第2章「子どもの感性と音楽の精神世界」―」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第35号、48頁

¹⁷ 高野茂、1995「人間の聴覚と音楽」、『佐賀大学研究論文集』42(2)、162頁

要素であると考え。音色や音の重なりや和音を含めた「響き」に注目し、さらに音の流れである「フレーズ」を感じ表現することがフィンランドの音楽科教育の根底にあり、具体的な学習内容において「聴く」ということの取得が、より高度な「表現活動」となるのである。」¹⁸と分析している。教育先進国であるフィンランドが音楽教育において「聴く」ということを重要視していることは、看過することはできない。また、田原は前述の研究の中で、西洋人—フィンランド人—と日本人の間では「聴く」という意味が異なると言っている。「聴く」という意味がフィンランドの場合と異なり、日本では積極的に「聴く」ではなく、自然に「聞く」「聞こえてくる」環境の下で人々は生活している。日本の子どもたちが音を「聴く」ということを知るということは、自分の声や楽器の音だけでなく、自然の音や子どもたちを取り囲む生活の音を、耳をすまして「聴く」ことに結びつくであろう。音楽活動においては、互いの歌声や楽器の音を「聴いて」音を合わせて演奏し、音楽を楽しみ、豊かな情操を育むことに繋がる。したがって、この「聴く」こととは、音楽を形作っているすべての要素を学ぶ根底となり、学習内容のすべての領域で活用できると考える。」¹⁹ということなのだが、確かに音の溢れている今の日本では、「耳をすまして聴く」という体験は、なかなか難しいことと言えよう。

さらに、岡本拓子が大学生に対して行った「音日記」の実践で興味深い結果を報告している。「音日記」を書くことによって、自身や周囲の発する音を意識するようになり、「生活や行動に変化をもたらした」、「子どもにとっての音環境の大切さに気づくことができた」など、自分の発する音を意識することの必要性に気づく学生も多く見られた。」²⁰というものである。我々がいかに音に溢れた環境にいるのかということに気づくことができなければ、自分にとって必要な音、不必要な音を選択することができないであろう。そしてこの実践結果により、我々がいかに音を聞き流して生活しているのかがわかるのである。

以上のことから、「音を聴く」ということ、またその音環境がいかに重要なことであるのかを理解することができるのではないだろうか。そして、残念ながら日本においては幼児や初等の音楽教育において、音を聴くトレーニングや、音環境・サウンドスケープに関しての指導が遅れている。もちろん、それを指導する側の保育士や教師に対しても、「音を聴く」という行為がいかに重要かということが指導されていないのであろう。仮にサウンド

¹⁸ 田原昌子、2012「我が国の音楽科教育法に関する研究 I—フィンランドに学ぶ音楽科教育法—」、『プール学院大学研究紀要』第 53 号、66 頁

¹⁹ 田原昌子、上掲、66 頁

²⁰ 岡本拓子ほか、2013「「聴く」ことから始まる音環境への関心—保育者・教員養成校における「音日記」の実践—」、『日本学校音楽教育実践学会紀要』第 17 号、289 頁

スケープといった体系立てられた指導ではなくても、日本人が昔から季節の音や虫の声を敏感に感じていたように周りの音にもっと「耳を澄ます」ことが実践できれば、音に対する感受性も養うことができ、音や音楽に対して興味を抱かせ、音楽を学ぶことに繋げることができるのではないかと考える。

前述の進藤務子は芸術と教育に関して「幼児に関わる保育者や幼稚園教諭は、芸術は芸術そのものであることに価値があり、芸術的であろうとすることが、結果的に感性や想像力、美的情操を自ずと育むことになるのだということをきちんと意識し、そして、子どものなかで創造性の萌芽を促すために、最大限、子どもの内面から、感動を引き出す働きかけをし、感動や喜びを共有し、それぞれの子どものさまざまな表現を認める姿勢が必要である。」²¹と述べている。「音を聴く」ことで感性に磨きをかけ、磨き上げられた感性によって音楽を学び、楽しむ準備を整え、より自由で柔軟な創造性に繋がっていくと考えられる。

このような音感教育は、たとえピアノが弾けなくても、歌の指導ができなくても、十分な音楽的知識がなくても、保育者がそのコンセプトに共感を持って取り組み方を工夫すれば、例えば前述の北村が述べているように、「耳をすまして聴くことから得られる「音」を聴く楽しみや「音楽」する喜び、「人生」の幸福までをも、子どもたちに伝える努力をしたい」²²といった明確な目的意識を持って取り組みさえすれば、誰にでも行える教育方法なのではないだろうか。

以上のことを踏まえて、筆者は幼児だけでなく保育者にも「音を聴く」大切さを体感できる授業実践を行おうと試みた。

²¹ 進藤務子，2010「心をはぐくむ幼児音楽教育―第1章『創造性と幼児音楽教育』―」，『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第33号，32頁

²² 北村音壺ほか，上掲，174頁

第3節 聴く耳を育てる音楽教育の実践について

では、聴く耳を育てる音楽教育の実践を行うためには、一体どのようなアプローチを行えばよいのであろうか。

耳を育てるということは、聴覚を鍛える、音を聴く技術を磨くということである。このことから考えると、楽器を使って音高や音程を正確に聴き分ける指導になりがちであるが、筆者はまず、身の回りの音に敏感になることが大切なのではないかと考え、サウンドスケープ的なアプローチで音を捉えることから始めようと考えた。レーモンド・マリー・シェーファー(Raymond Murray Schafer 1933-)の実践したサウンドスケープの概念に関して鳥越けい子は、「シェーファーが、このサウンドスケープ概念をもとに、これまで「音をつくる技術」として位置づけられていた音楽活動を、「音を聴く技術」という側面から捉え直し、そのための具体的なプログラムを開発したこと。」²³とやっているし、実際にシェーファーは彼の著書『サウンドエデュケーション』において、彼自身が実際に行った実践を通じて開発した具体的なプログラムを提案している。それらをもとに、筆者が普段音楽指導を行っている、和歌山県の私立 T 保育園において、6 種類の授業実践の内容を考案し実施した。

T 保育園は私立ということもあり、保育園での音楽教育への取り組みも熱心で、0 歳児から 3 歳児はリトミック、4 歳児から 5 歳児はマーチング・ドリル、和太鼓などの打楽器合奏の指導などが日常的に行われている。そうした環境に加え、幼児の家庭での音楽環境の状況も把握しておきたいと考え、授業実践を行う前に幼児の保護者にアンケート²⁴を取り、調査してみた。結果は家庭での音楽環境に関しては、どちらかと言えばあまり熱心とは言えない状況²⁵であった。おそらく幼稚園ではなく保育園ということもあり、保護者が普段から子どもに時間を掛けてやることができないということだからなのであろうか。ほとんどの幼児が、家では音楽を視聴するくらいで、習い事の一つとして音楽活動をしているわけでもなく、取り立てて音楽とは密に接していない、また家族の誰かが音楽と密接に関わりがあるといったような、幼児の身近な人間関係においても音楽を享受している人が少ない環境であった。以上のことから、それぞれの幼児の音楽的土壌としては、ほとんど差が見られないため、授業実践には最適な環境だと言えるであろう。

²³ 鳥越けい子、1997『サウンドスケープ [その思想と実践]』鹿島出版会、92 頁

²⁴ 家庭での音楽環境アンケート用紙 参考資料 4 参照

²⁵ 家庭での音楽環境アンケート結果 参考資料 5 参照

実践の内容としては、

①身近にある音を聴くための実践

①－ i 楽器の音を擬音化し，身近にあるどのような物音に似ているのか体感する授業実践

①－ ii 身近にある物音を擬音化し，楽器で模倣し，楽器以外の音も音楽としての可能性のあることに気付かせる授業実践

②音の違いと音高を感じるための実践

②－ i 楽音ではない簡単な 3 音の聴き分けの授業実践が 2 週間

②－ ii 音の高さをもっと細かく刻み，楽音として音程というものを聴き分ける授業実践が 2 週間

③音を作り出し探し出す実践

③－ i 同じ楽器でも奏法が違うことで色々な音が出ることを知り，同じ素材で様々な音を自分たちで作り出す授業実践

③－ ii 絵や擬音から自分の頭の中でイメージした音を探し出す授業実践

以上，計 6 種類の授業実践を行った。対象とした園児は，4 歳児と 5 歳児。ただし②音の違いと音高を感じるための実践，③音を作り出し探し出す実践に関しては 5 歳児のみ行った。

第2章 保育現場での授業実践と結果

第1節 身近にある音を聴く実践

身近にある音に敏感になるための授業実践と手順は以下の通り。4歳児と5歳児に実践した。

第1回目 2016年4月12日，第2回目 2016年4月18日

授業実践 第1回目「楽器から身近な音へ」

子どもから見えないように大きなホワイトボードの後ろで楽器の音を出し，音を聴かせた後，子どもたちに擬音語で模倣させる。そして，自分たちの周りにあるどんな音に近いかを答えさせた後，実際に楽器を見せて紹介し，最後にそれぞれ子どもが触りたい楽器を一種類だけ触らせた。

【楽器の種類】

ココナッツ，カエルギロ，ライオンロア，バードコール，オーシャンドラム，サンドペーパーブロック，風鈴，レインスティック，トーンタング，サイレンホイッスル

図 2-1-1：ココナッツ(板をココナッツで叩く)

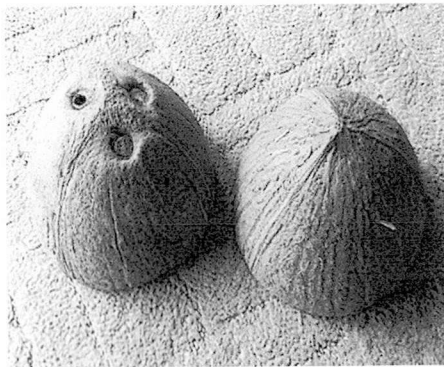


図 2-1-2：カエルギロ(カエルの鳴き声)



図 2-1-3：ライオンロア(ライオンの鳴き声)

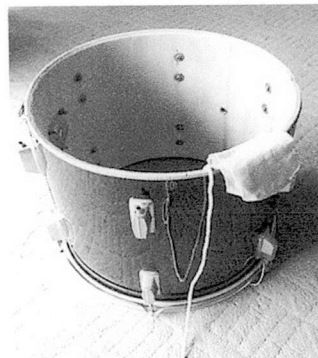


図 2-1-4 : バードコール(鳥の鳴き声) 図 2-1-5 : オーシャンドラム(波の音)



図 2-1-6 : サンドペーパーブロック
(足で床を擦る音)



図 2-1-7 : 風鈴(風の声, 風を感じる音)

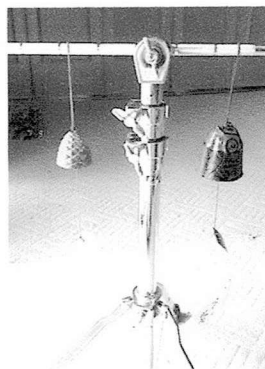


図 2-1-8 : レインスティック(雨の音)

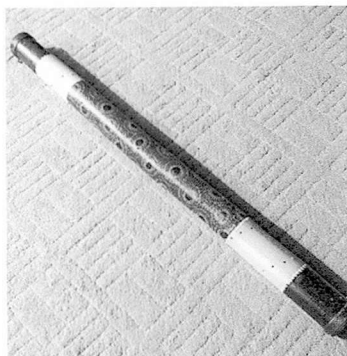


図 2-1-9 : トーンタング(木のおもちゃ)

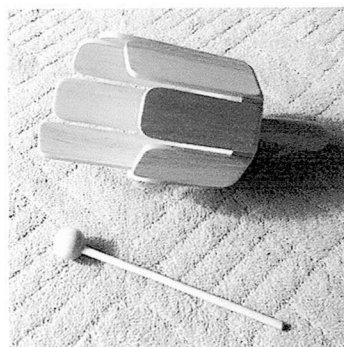


図 2-1-10 : サイレンホイッスル





図 2-1-11 : 実践風景(5 歳児 1 回目)

【結果】

<4 歳児>

提示	園児の擬音語	園児の回答	所見
①ココナツ	カチッカチッ	方法が理解できていなかった様子で、擬音から身近な音の具体的な回答はなかった。	音を擬音化してほしいという、こちらの意図は理解していたみたいだが、その後、何の音だろう？という問いかけに対しては、身近な音を具体的に回答できなかった。こちらの説明不足もあると考えられる。こちらの「パカップカッ」という問いに対しては、馬という返答があった。
	タカントカン		
②カエルギロ	カラッカラッ	カラスの鳴き声	2種類目ということで、子どもたちも方法が理解できたらしく、すぐにカラスという答えが出た。そして、楽器を見せることで、カエルと答える子どもが増えた。楽器が小さいせいか、比較的音高が高く、身近にいるカエルは、もう少し低い声で鳴いているのかもしれない。
	カランコロン	カエル	
③ライオンロアー	ウォー	牛の声	まず、ウォーと叫び出す子ども、そして不快な音なのか耳をふさいだりする子どもがいた。身近に存在する音ではないが、身近にある太鼓に細工をしている楽器のため、楽器の説明では興味津々であった。
		怪物	
	ガオーと言いつ出す		
④バードコール	ピヨピヨ	ヒヨコ	比較的早い段階でヒヨコという回答が出た。
	チチチ		
⑤オーシャンドラム	スコーン	ペットボトルの音	普段の音楽活動で、ペットボトルに砂を入れたペットボトルマラカスを使っているため、その音を想像した子どもが多かった。おそらくそこから導き出された、ペットボトルの音、砂の音だという回答かと思われる。また、「バチャン」という衝撃音の時に、身体が反応している子どもが数人いた。また、この実践の中で一番たくさんの擬音語が出た楽器でもある。
	ジャジャ	砂の音	
	シャー	ゴミ収集車	
	バチャン	シャワー	
		雨の音	

提示	園児の擬音語	園児の回答	所見
⑥風鈴	チリンチリン	サンタさんの音	風鈴を知っている子どもが少なく、レストランなどの店舗の入り口のドアチャイムを想像した子どもが多かった。また擬音語で鈴を想像したためか、サンタさんの音という回答に繋がったと思われる。
	カランカラン	レストランの音	
⑦サンドペーパーブロック	シュッシュッ	ペットボトルの音	ここでも、ペットボトルマラカスの音を想像した子どもが数人いた。そのために砂の音が出てきたと思われるが、機関車の音も比較的早い段階で回答されていた。本人が実際に機関車の音を知っているの回答なのか、絵本から得た概念からの回答なのかは疑問が残る。
	シャッシャッ	機関車の音	
		砂の音	
		汽車の音	
⑧サイレンホイッスル	ビューン	風の音	音自体は聴いたことのある子供が多かったが、まず最初に出た回答は風の音であった。少しして救急車という回答が出たが、これも楽器が小さかったせいか、少し音高が高かったためサイレンの音とは捉えにくかったかと思われる
		救急車	
⑨レインスティック	シュー	シャワー	擬音語があまり出なかったが、ほぼ、オーシャンドラムと同じような回答となった。ことらとしては、オーシャンドラムと離して体験させた方が興味が湧くかと考えたが、逆に似たものの音を近くにして聴かせ、違いを考えさせるというのも面白い方法だったのではないかと思えた。ただ、風の音と表現する子供もいて、こちらの思惑とは異なり子どもの自由な発想力に驚かされた。
		水の音	
		海の音	
		風の音	
⑩トーンタング	カランカラン	ビー玉の音	カエルギロと同じような擬音語の回答だったが、あまり身近でない音だったせいか、何の音かという回答が出る際には時間が掛かった。
	カランコロ	カエルの音	
		電車が通過する音	

<5 歳児>

提示	園児の擬音語	園児の回答	所見
①ココナツツ	カタンカタン	椅子の音	何か丸いものが当たっている様子と答えた子どもがいた。分析する力が育っている様子であった。また、ホワイトボードの下から覗いてココナツツと答えた子どもがいた。
②カエルギロ	ガランガラン	ドアの音	ドレミファソラシドの音が鳴っていると答えた子どもがいた。おそらく木琴をグリッサンドした音だと想像したのであろう。また、こちらが動物の何の鳴き声に聞こえると質問したところ、比較的早い段階でカエルという答えが出た。
	カランカラン	ペットボトルの音	
		ウッドブロックの音	
		カエルの鳴き声	
③ライオンロアー	ゴロゴロ	雷の音	不快感に耳を押さえた子どももいたが、4歳児よりは少なかった。びっくりしたと言葉にしている子どもがいた。楽器で出している音だということが理解できているため、どのような楽器で出ている音なのかの興味の方が大きい様子であった。
		オオカミの鳴き声	
		おならの音	
		象の鳴き声	
④バードコール	ピヨピヨ	ヒヨコの声	音が出た瞬間にヒヨコと一斉に答えが出た。しかしながら、キュッキュッという音が苦手なせいか、耳をふさぐ子どももいた。
⑤オーシャンドラム	シャーシャー	雨の音	雨より激しい音ということで、嵐を想像した子どもがいた。また、何かを焼いている音と答えた子どももいた。何種類もの音が連動しているために、それぞれの部分で音を聴く子供が多く、様々な擬音語、回答が出てくる楽器であった。
	ザラザラ	嵐の音	
	シャー	物を焼いている音	
	パチャン	波の音	
⑥風鈴	チリンチリン	風鈴の音	やはり、5歳児は風鈴を知っている様子で、すぐに風鈴という回答が出た。
		ベルの音	
		自転車の音	

提示	園児の擬音語	園児の回答	所見
⑦サンドペーパーブロック	シャッシャッ	たわしの音	擦っている音という回答がすぐに出た。こちらが周りの音で、同じような音は何か？という問いを投げかけると、たわしの音やブラシの音、歯磨きの音など、生活に密着した音を回答した。
		ブラシの音	
		歯磨きの音	
		服のブラシの音	
⑧サイレンホイッスル	ウー	風の音	サイレンという言葉はわからないみたいだが、すぐに警察の音、救急車の音といった回答が出た。しかしながら、サイレンホイッスルの音高が高いせいか、風の音や風船の音(おそらくピーピー風船)を想像した子どももいた。
	ピュー	警察・救急車	
		風船の音	
⑨レインスティック	ジャージャー	水の音	オーシャンドラムとの違いが分かった様子で、水の音やおしっこの音など落ち着いた水の音を想像していた。しかしながら雨という回答は得られなかった。彼らの身近な雨の音はもう少し大きい音なのかもしれない。
		おしっこの音	
⑩トーンタング	カランコロン	雷の音	さっき(カエルギロ)と一緒に回答する子どももいたが、違いは分かっている様子であった。しかしながら、身近な音に思い当たるものは無いみたいであった。
	コロンコロン		

<最後に選択した楽器>

	4歳児	5歳児
ココナッツ	1人	2人
カエルギロ	5人	3人
ライオンロアー	1人	0人
バードコール	1人	1人
オーシャンドラム	3人	1人
風鈴	1人	2人
サンドペーパーブロック	1人	2人
サイレンホイッスル	2人	4人
レインスティック	1人	2人
トーンタング	3人	2人

4 歳児は見た目に変わっている楽器に興味を持った様子であった。5 歳児はどちらかと言えば、奇妙な音に興味を持った様子であったが、ライオンロアーに関しては、不快感なのか、外観が身近にある楽器のためか、あまり興味がなかったようであった。

授業実践 第2回目「身近な音から楽器の音へ」

1回目の最後に、次の時(2週間後)までに面白い音を探してくるよう宿題を出した。その探し出した自分たちの身近にある音を擬音語で表現させ、筆者がその音をフライパンやまな板、擬音楽器などで即興で再現する。身近な音が見つかっていない場合は、見つけるためにその場で目をつむって、周囲の音に耳を傾けるよう促す。その後、擬音を再現した楽器の名前を紹介し、最後に一種類のみ楽器を触らせる。

【結果】

<4歳児>

園児の回答及び提示	園児の擬音語	筆者の活動	所見
電車の音	ガタンガタン	拍子木で床をたたく	何人か回答のない子がいたが、音を出すと注目するので、興味はかなりある様子。また身近な音を擬音語に表すというよりは、擬音語自体に興味がある様子で、誰かが回答した音に対して、様々な擬音語を出してくる子どももいた。
踏切の音	カンカン	フライパンをたたく	
バイクの音	ブーン	ラチェット	
時計の音	カチカチ	フライパンを細いばちでたたく	
すべり台の金属の音	カンカン	カウベルを握って響かせずにたたく	
すべり台の音(摩擦の音)	ビュー	大太鼓を手で押さえつけてこする	
ブランコの音	キィキィ	バードコールをゆっくりきつく回す	
風の音	ヒュー	大太鼓を手でこする	
風の音	ビュー	大太鼓を手でこする	
水の音	バシャバシャ	バンブーチャイムをつかむ	
カエルの声	ケロケロ	カエルギロ	
ライオンの声	ウォー	ライオンロア	
階段の音	カタンカタン	まな板をばちでたたく	
階段の音	トントン	まな板をばちでたたく	
階段の音	コトンコトン	マラカス	
??の音	シュカシュカ	マラカス	

園児の回答及び提示	筆者の活動	所見
地震の音	ドーン・ドンドン	
	子どもたちが答えた風の音に関して、普通はウィンドマシーンや大太鼓をこすることで表現するが、風の存在を表すためにウィンドチャイム、シェルチャイム、バンブーチャイムなどで風が表現できることを教えた。	

4 歳児は、かなりたくさん擬音語を見つけてくれていて、自分たちの周りの音に興味がある様子だったので、続いて一緒に目をつむって周りの音を聴くサウンドスケープの体験を行ってみた。他のクラスの声（泣き声）が大きく周りの音が聴きにくい環境と車の音が静かになったためか、基本的にそれほど周りの音が聴こえない状況であったが、赤ちゃんの泣き声の他に、歩く音やドンドンと何かを叩く音、トラックの音、床を走る音などが聴こえたので、一人ひとり、トラックの音をメタルラチェットで表現させた。

<5 歳児>

園児の回答及び提示	園児の擬音語	筆者の活動	所見
レストランの呼び鈴	チン	呼び鈴を鳴らす	前に並んでいる楽器のことが気になっている様子であった。そのため、自分で見つけてきた音ではなく、目の前の楽器から想像した擬音語を答えた子もいた。
料理の音	グツグツ	鍋にビーズを入れ蓋をして振る	
ピアノの時の音 (ピアノのコンサートで聴いたウインドチャイムの音)	チリンチリン	ウインドチャイムを鳴らす	
いびきの音	グーグー	ライオンロアを擦る	
こちらが例として風の音を挙げる	ビュービュー	大太鼓をサンドペーパーでこする	

5 歳児のこの実践に関しては、残念ながらあまり擬音語が出てこなかった。そのため、身近な音を見つけてもらうため、目をつむって周囲の音に耳を傾ける、サウンドスケープを体験させることにした。しかしながら、4 歳児同様、静かな音環境であるため、特徴的な音があまり聞こえなかった。また、どのように答えたらよいのかわからないということ

もあるようであったので、筆者が「ドアがボタンという音」と「車の通る音」の例を2つ出した。後半になればなるほど、音を見つけ出そうという意識が出てきたらしく、時計の音や、階下の給食室の音などまで注意が向くようになった。

楽器から身近な音を感じる実践に関しては、楽器への興味もあり色々な音に関心を持っている様子であった。しかしながら、身近な音を楽器へ置き換えるために、周囲の音に耳を澄ますことについては、なかなか難しいものがあるのかもしれないと思われた。子どもたちの性格的なものもあるのかもしれないが、5歳児より、4歳児の幼児の方が素直に周囲の音を捉えられている感じがした。5歳児の幼児は、おそらく音楽として音を捉えることが生活のなかで増えてきているのかもしれない。また、最近の電化製品や、自動車などが静音設計になっていることから、日常の音に関しても様変わりしているということも考えられる。

以下は、5歳児の担任の保育者による所見である。「身近な音を感じ、様々な楽器に触れさせていただき、その直後は生活の中の音に気づき、言葉で表現している子どもが数人いました。音の表現の仕方や感じるという楽しさを今回の体験を通して少しは感じてもらえたように思いました。」ということから、筆者が実践中に感じていたよりも、身近な音への気づきへの目的は果たせたように思える。導入部分と考えられる、第1回目の実践に関してはこの方法で問題がないと思われるが、第2回目の実践に関しては、実践をしながら、もしくは実践の前に、一緒に音さがしの散歩に出るなどの工夫が必要だと感じた。

第2節 音の違いと音高を感じる実践

簡単な音の違いと半音を含む音程の違い(3音の中から)を感じるための授業実践と手順は以下の通り。5歳児のみに実践した。

第1回目 2016年5月26日，第2回目 2016年6月9日

授業実践 第1回目「簡単な3音の聴き分け」

3個のカップに大きさの違う石を入れ，中身を見えないようにし，その音の違いを音当てゲームとして聴き分けてみる。石が大きくなればなるほど低い音になり，小さくなればなるほど高い音になる。

【実践手順】

筆者と子どもはそれぞれ同じ3つのカップを持ち，筆者が3つの中から一つのカップを振る。その後，子どもが3つのカップをそれぞれ振り，その中で同じだと思えるものを指し示す。第1回目は未体験の状態で行い観察した後，2週間，毎日朝から音当てゲームをクラスで練習してもらう(3音それぞれ1回ずつ聴き分ける。練習は一日一回のみ)。2週間後，再び一人ずつ筆者と音当てゲームを試してみる。

図 2-2-1 : 3種類の石



図 2-2-2 : 3種類の石を入れたカップ



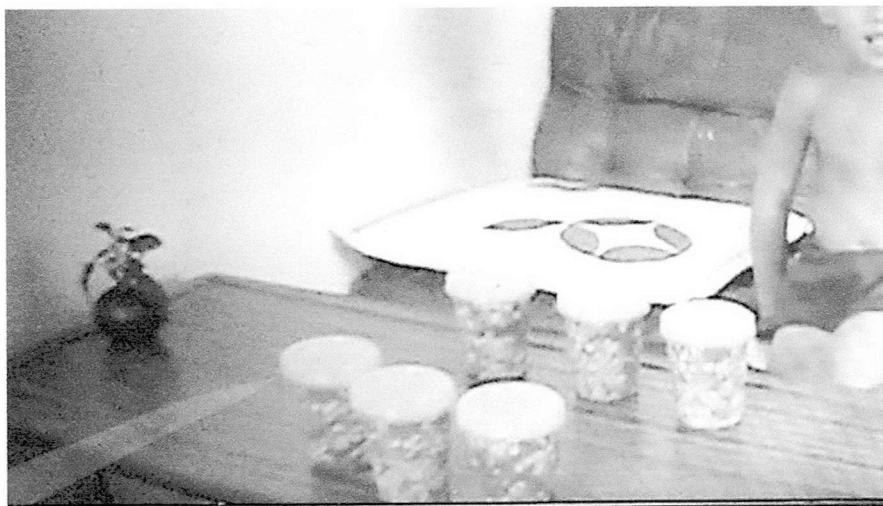


図 2-2-3：実践風景(5 歳児)音高違いのカップ

【結果】

1 回目

	正解	不正解
大	4(40%)	6(60%)
小	9(90%)	1(10%)

2 回目

	正解	不正解
大	7(88%)	1(12%)
中	7	0
小	5	0

1 回目の実践時は予備練習なしで、子どもの半分の 10 名に一番大きい石の音を、あとの半分の 10 名に一番小さい石の音を聴かせ、音当てをさせてみた。結果、小さい石の音では不正解は 1 名のみだったが、大きい石と中くらいの石の音の聴き分けがなかなか難しかったらしく、6 名が不正解であった。2 週間の練習後の 2 回目は、中くらいの大きさの石の音も混ぜて、3 種類ランダムに音当てをさせたところ、大きい石の音のみ 1 名の不正解が出ただけで、あとは全て正解であった。また、2 週間の練習の様子を担当の保育者に聞いたところ、2 週間目にはほぼすべての子どもたちが音の違いを聴き分けていたという事であった。

以下は 5 歳児の担任の保育者による所見である。「毎日、数回遊び感覚で音当てをすることを繰り返すことで音の聴き分ける力が育ち、一人で判断できるようになる子供が増えたことに私自身驚きました。保育の中で行っていた時も当たると嬉しかったようで、耳を澄ませて聴き、楽しんで音に親しむことができました。中身をのぞき込みどのようにして音が鳴っているのかに興味を示している子どももいました。」また、筆者の普段の音楽指導において、小太鼓や中太鼓のチューニングの違い、例えばチューニングが狂っているた

めにいつもと違う音とか、周りの太鼓とチューニングが違うことでなんだか変な音だと気になる子どもが増えたことに、筆者自身も驚かされることがあった。時期も重要だとは思いうのだが、このような単純な音高の違いは 1～2 週間くらいで鍛えられることに、子どもの柔軟な感性の可能性に感心させられた。

授業実践 第 2 回目「音程の聴き分け」

ハンドベルを使って音の高さをもっと細かく刻んで、音程というものがあることを感じ、聴き分けるための授業実践と手順は以下の通り。5 歳児のみに実践。

第 1 回目 2016 年 7 月 21 日、第 2 回目 2016 年 8 月 4 日

音高の聴き分けと同様に、ハンドベルで 3 つの音(1 回目の未体験の状態では C, Es, Fis, 2 回目の練習後は C, Cis, D)の音を聴かせて、音当てゲームを行った。

【実践手順】

筆者が、すべて色分けされていない金色の 3 つのハンドベルの中から一つを振る。その後、子どもが 3 つの園保有の色分けされたハンドベルをそれぞれ振り、その中で同じだと思うものを指し示す。1 回目に未体験の状態を観察した後、2 週間、毎日朝から C, Es, Fis 以外の音も入れて、ランダムにハンドベルで音当てゲームをしてもらう(しかし毎回 3 音のみ選んで、それぞれ 1 回ずつ聴き分ける。練習は一日一回)。2 週間後、再び同じ要領で一人ずつ音当てゲームを試みるが、音は C, Cis, D にする。



図 2-2-4 : 実践風景(5 歳児)ハンドベル

【結果】

1 回目

	正解	不正解
C(15 名)	8(53%)	7(47%)
Es(3 名)	2(67%)	1(33%)
全体	10(55%)	8(45%)

2 回目

	正解	誤答 C	誤答 D
C#(19 名)	7(37%)	9(47%)	3(16%)

1 回目は C, Es, Fis, の 3 音を机の上に並べてあるが、実際に使ったのは C と Es のみ。3 音の音高比べの後であるからだろうか、初めてにしては半分以上の正答率ということで、比較的高い正答率であった。2 回目は、音程差の少ない半音 3 音の聴き比べとして、C, Cis, D を机の上に並べた。しかし、どの子どもに対しても Cis を聴かせて音当てを行ったところ、正答率は 3 分の 1 であった。また誤答した音に関しては、D より C の方が誤答が多かった。やはり半音の聴き比べはかなり難しかったと考えられる。また、音程のない音高比べと音程のある音高比べのそれぞれの第 1 回目の正答率は音程のない音が 65%, 音程のあるハンドベルが 55%とそれほど変わりはないが、2 回目に正答率が上がったのは、音程のない音高のみの聴き分けの方であったため、音程のないものの方が聴きやすい、聴き比べ易いのだろうと推測できる。

以下は 5 歳児の担任の保育者による所見である。「毎日音当てをゲーム感覚でしてみると、大きく差のある音は答えられるが、やはり近い音は答がバラバラになってしまうことが多かった。この期間(2 週間)では色々な音を認識していくことは子どもたちにとっては難しい事であったのだと感じた。」

その後、T 保育園は、夏休みがあったり、運動会の練習などで忙しくなったため、音当てを中断していたが、子どもたちが音当てゲームをかなり気に入っているらしく、半音の音当てはどれくらいの期間を要するのか、引き続き練習を続けている。今回は C, Cis, D のみの 3 音のみ抽出して聴き分け練習を行っている。

3回目、4回目、5回目の結果は以下の通り。

【結果】

第3回目 2016年11月2日 正答率47%

	C	C#	D
C(6名)	◎4(67%)	2(33%)	0
C#(6名)	2(33%)	◎2(33%)	2(33%)
D(7名)	2(29%)	2(29%)	◎3(42%)

第4回目 2016年11月17日 正答率45%

	C	C#	D
C(7名)	◎5(72%)	1(14%)	1(14%)
C#(4名)	1(25%)	◎1(25%)	2(50%)
D(9名)	3(33%)	3(33%)	◎3(33%)

第5回目 2016年12月1日 正答率60%

	C	C#	D
C#(10名)	2(20%)	◎7(70%)	1(10%)
D(10名)	2(20%)	3(30%)	◎5(50%)

3回目、4回目の結果からCの音は答えやすいと考えたため、Cを外してほかの2音のみで行った。もちろん、ハンドベルは子ども、筆者のそれぞれの前に3つ置き、状況は同じ。

5回を通しての結果

5問正解	4問正解	3問正解	2問正解	1問正解
1名	4名	1名	9名	5名

第2回目と第3回目の間に運動会などの行事が入り、かなり久しぶりに行ったため、正答率は低めであった。そのまま2週間後に行ったが、変化が見られなかったため、筆者が練習の提案として、まず、C#とDの聴き分けのみ1週間行ってもらい、次の1週間でCとC#の聴き分けをするようお願いしてみたところ、第5回目では、正答率が6割とかなりの好成績を残すことができた。

また、5回を通して、5問全問正解は1名のみ、1問正解者は、5名中4名が後半の時期に正解していた。多少の練習の成果は見られるのかもしれない。

しかしながら、この第5回の実践をした後の、音楽活動時の歌唱は非常に音程が良く取れていたのは、偶然ではないと考えられる。微妙な音高の違いを聴き分けようと、音に一所懸命耳を傾けることが、子どもたちから音楽的な能力を引き出したかもしれない。

第3節 音を作り出し探し出す実践

一つの楽器を演奏するにあたり、奏法を変化させることで色々な音が出ることを知り、自分たちで音を作り出してみる。そして、絵本に出てきたイメージの音を探し出す授業実践と手順は以下の通り。5歳児のみの実践。

第1回目 2016年8月4日、第2回目 2016年8月10日。

授業実践 第1回目「同じ楽器でも色々な音が出る」

1つの楽器、または1つのものから色々な音が出るということを体験させるために、筆者が様々なマレットを使用してシンバルを演奏する。その後、子どもたちに実際に1つのものから色々な音を作り出させる。本来なら楽器を使用して実践したいところだが、幼児ということで、楽器を粗雑に扱う危険性を考慮して、一人ひとりに紙を配布し、その紙を使って色々な音を考えて作らせてみる。

【使用したマレット】

図 2-3-1：木のマレット



図 2-3-2：コントラバス弓



図 2-3-3：ワイヤーブラシ



図 2-3-4：ゴムマレット



図 2-3-5 : 毛糸まきマレット大



図 2-3-6 : 毛糸まきマレット小

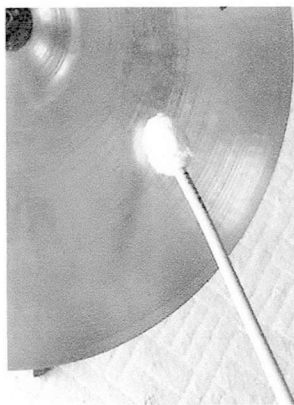


図 2-3-7 : ティンパニマレットノーマル 図 2-3-8 : ティンパニマレットフランネル



図 2-3-9 : ゴングマレット

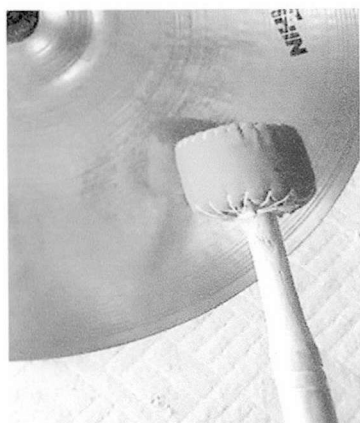


図 2-3-10 : 木ねじ

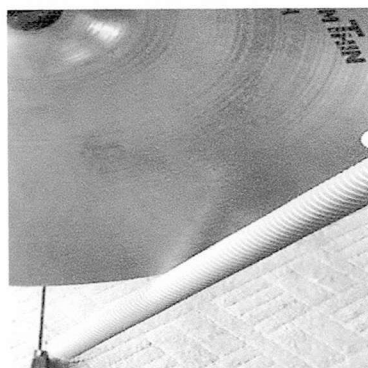


図 2-3-11 : トライアングルビーター
(叩く, こする)

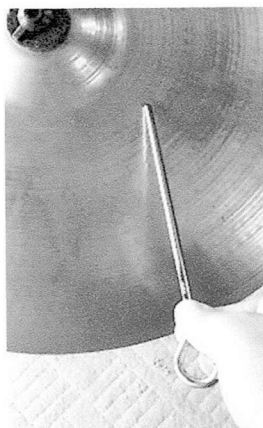


図 2-3-12 : トライアングルビーター
(弾ませる)



図 2-3-13 : 授業実践(5 歳児) シンバルの様々な音を聴く

【結果】

色々なシンバルの音を聴く	
マレット素材	子どもの反応
木のマレット(木琴)	
コントラバス弓	怖い、宇宙っぽい音
ワイヤーブラシ	小さい音
ゴムマレット	ゴムっぽい音・柔らかい
マリンバマレット(毛糸まき大)	聞き比べて、全然違うことを認識。
マリンバマレット(毛糸まき小)	
ティンパニマレット(フェルト・ノーマル)	夜の音
ティンパニマレット(フェルト・フランネル)	硬い音がする
ゴングマレット	いい音
木ねじ	なぜ、このような音が鳴るのか興味を示し、観察している様子。
Tri.ビーター(そのままたたく)	
Tri.ビーター(こする)	
Tri.ビーター(叩いた後弾ませる…シズル)	



図 2-3-14 : 授業実践風景(紙を使って音を作る)

【結果】

紙で音をつくる	
紙を波のように振る	指ではじく
手で叩く	紙を手で挟みこすりあわせる
紙 2 枚でシンバルのように叩く	床に置いて叩く
ぐちゃぐちゃに丸める	紙を皺々にしてこする・振る
細かくちぎった紙を撒いて床をたたく	紙を丸めて床にたたきつける
口を紙で塞いで息で音を出す	紙を破る(きれいなもの・皺々なもの)
紙で床をこする	紙を丸めたものを手でこする
紙を細かくちぎったもので床をこする	皺々の紙をやさしくなでる
折った紙をひらく	細かくちぎった紙を上から落とす(高さによる音の違い)
細かくちぎった紙を手の中で振る	
皺々にした紙とまっすぐな紙を指ではじいた時の音の違い	

色々なシンバルの音を聴く実践では、変わったマレットを使用したせいか、音そのものよりも、マレットの方に意識が向いていたように感じた。しかしながら、コントラバスの弓でシンバルを擦った時の音を、宇宙の音と表現したり、柔らかいフェルトで巻いてあるティンパニのマレットの音を夜の音と表現するなど、抽象的な表現も聞かれ、次の授業実践につながる可能性を感じることができた。また、紙で音をつくる実践では、一人ひとりに発表をしてもらおうとしたが、人前で発表することに慣れていないせいか、実践中は積極的に音を作っていた子どもが、急に何も言えなくなったりした場面が多くあり、こちらが実践中に子どもたちの発見した音を逐一抽出して導く必要性を感じた。しかし、筆者が考える以上に自由な発想で音を作り出した子どももいて、子どもたちの普段の保育で実践されているような、工作と同じ感覚で楽しむことができるのではないだろうか、次へ向けての可能性を感じることのできる実践となった。

以下は 5 歳児の担任の保育者による、シンバルの音を聴く及び、絵で音をつくる体験の所見である。「身近なものを使って音探しをしたので、子どもたちも楽しんで色々な音を探すことができた。友達がやっていることをまねて喜んだり、自分の発見を相手に伝える嬉しさを経験できたのでよかった。子どもたち自身も身近なもので色々な音を作り出せるということを体験を通して知ることができたのでよかった。」筆者自身は、この実践はどちらかと言えば個人での実践になるかと考えていたが、意外にも子どもたちは相互にコミュニケーションをとりながら実践していたことに驚かされた。

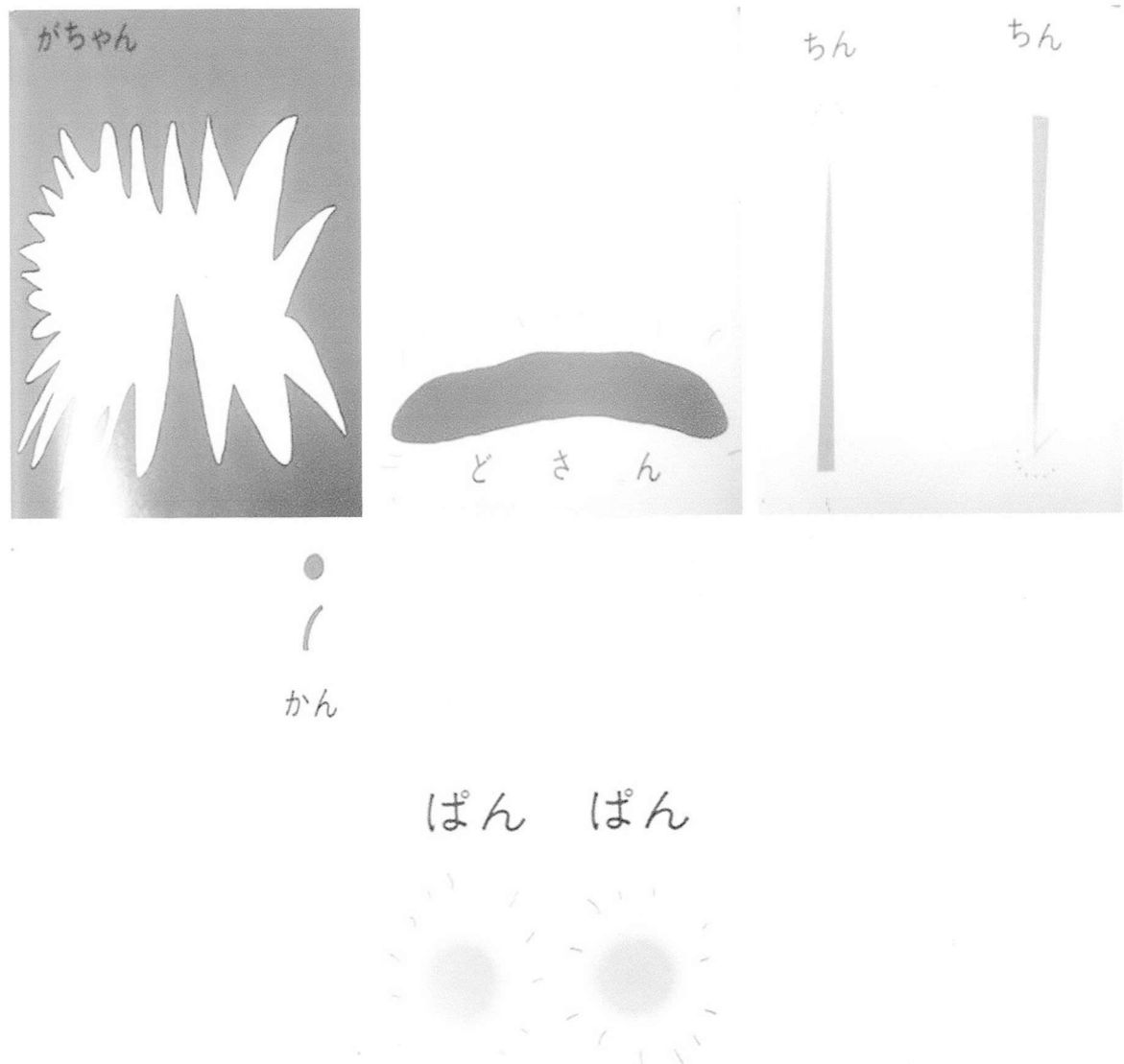
授業実践 第2回目「絵や擬音から自分のイメージした音を探し出す」

絵本，元永定正『がちゃがちゃ ドンドン』²⁶の中からいくつかの音を選ぶ。

例として以下の5つの音(図2-3-15)を私と子どもたちと一緒に考えて，音を探し出してみる

その後，4つの音を出し(図2-3-16)，子どもを4つのチームに分ける。そして，それぞれのチームに与えられた絵の音を相談しながら探してみる。

図2-3-15：音のイメージ例『がちゃがちゃ ドンドン』より



²⁶ 元永定正，1986『がちゃがちゃ ドンドン』，福音館書店

チームに分かれて子どもたちに探し出してもらった音

図 2-3-16：音のイメージ『がちゃがちゃ どんどん』より

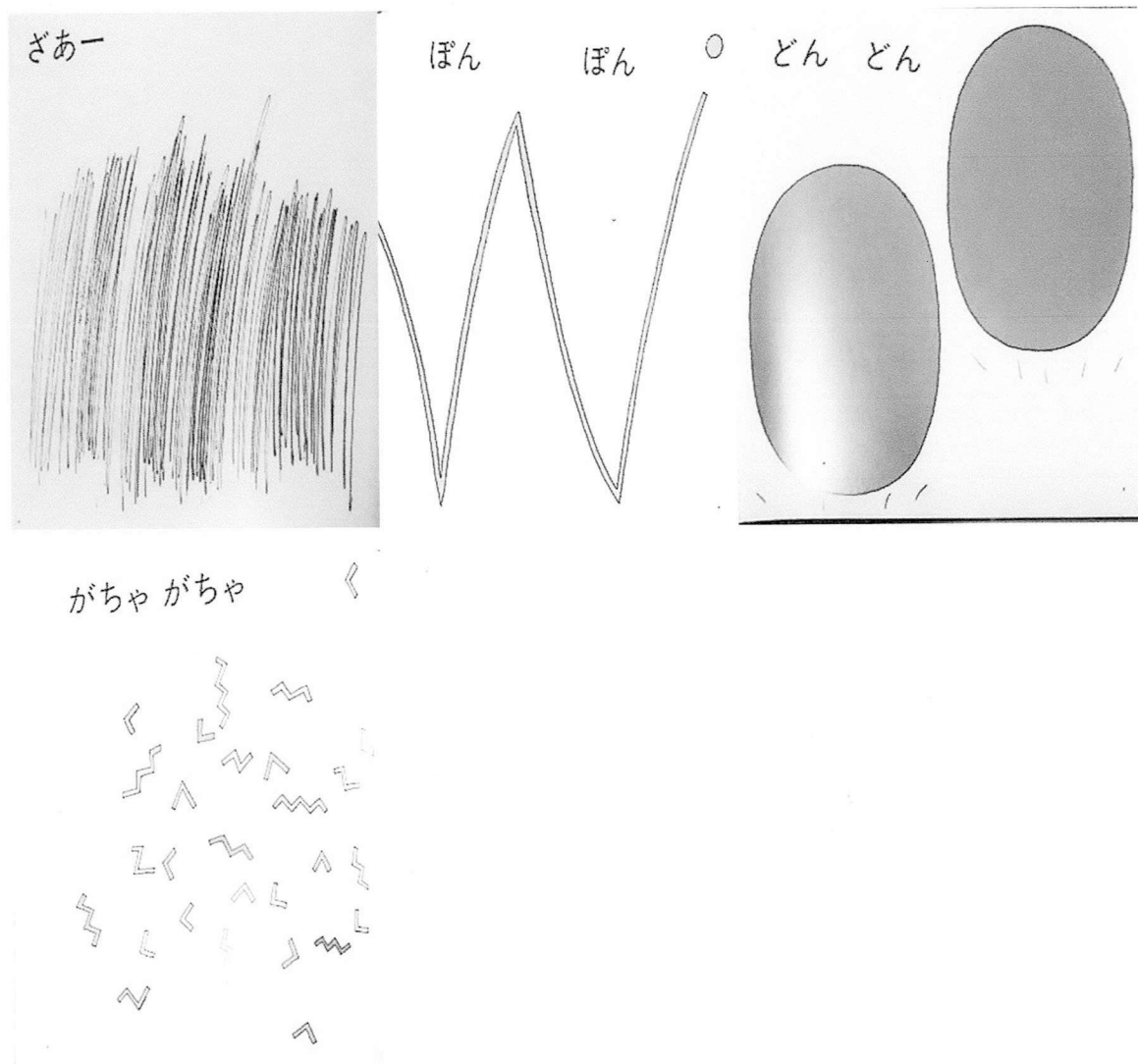


図 2-3-17：授業実践風景(絵本の音を探す)

【結果】

絵の音を出す			
	何の音？	どんな感じ？	探し出した音（筆者の活動）
がちゃん	シンバル		シンバルをたたく
どさん	大太鼓、うんこ？	重そう？軽そう？⇒ 石、粘土	布を分厚く畳んで絵のように床に落とし音を出す
ちんちん	トライアングル	三角を下に向けてみる（絵に描かれている三角形から）	絵本の中にある様々な「ちん」の絵をみせて、違いを意識させてみる。トライアングルの内側を上下にたたく。トライアングルのビーターを逆さに使う
かん	小太鼓・中太鼓	太鼓のわく打ち	小太鼓 Tri.ビーターでわく打ち
パン	手で叩く、シンバル	風船が割れた感じ	手を叩く

探し出した音(子供たちの活動)	
ざー	麦わら帽子の溝部分を擦り合わせる
ポンポン	プラスチックバケツを手で叩く
どんどん	大太鼓をたたく
がちゃがちゃ	おはじきの入った箱を振る
や	絵の具筆の入った箱を振る

絵本にある音を探し出してみる実践では、絵の情報よりも、文字、擬音語のイメージで音を想像する子どもが多かったため、絵のイメージなどからも想像するような働きかけをする必要があった。しかしながら、最初の授業実践で擬音語を発表した時よりは、かなり柔軟な発想と、間違ふこと、他人と異なることを恐れない様子を伺うことができた。そして自分たちで音を探し出す実践においても、同じチームで2種類の音が出てくるなどこちらの予想を超える反応があった。

以下は5歳児の担任の保育者による、絵本にある音を探し出してみる実践の所見である。「音探しでは、意外なものから音を出す子どももいて、子どもと一緒に音探しの楽しさを知ることができました。最近では、少しではありますが、「先生！こんな音する！」と気づいて教えてくれる子どもも出てきたように感じます。」この実践から、音色や出ている音に関して、様々な感じることでできる柔軟さや、感性の育成に繋げていける可能性を感じることができた。

第3章 今後の保育現場での音楽活動への応用

第1節 授業実践を踏まえた上での音楽活動報告

4種類の授業実践を行い総じて感じたことは、これらの音を感じる実践に、子どもたちはとても興味をもって取り組んでくれたという事であった。子どもたちの日常の中に新たな気づきを投じることができたからであろうか。

身近にある音を聴く実践の「楽器から身近な音」では、4歳児は絵本などで耳にした音の回答が多かったり、5歳児では生活感のある回答が多かったりと、それぞれの年齢で注意の向けられる音が異なっていた。5歳児になると、少しずつ社会が大きくなっていき、意識が自己より、より外へ向かうからであろうか。なかなか興味深い違いを浮き彫りにすることができたと思われる。

また、「身近な音から楽器の音」では、特に4歳児は擬音語を楽しみ、階段の音やすべり台の支柱の金属の音など、自身の働きかけによって発する音が多く、こちらが思いつかないような身近な音を見つけてきていた。5歳児は、実際の目的とは離れてしまったのであるが、自分たちの目の前にある楽器から、どのような音がするかという分析、想像をして擬音語を探していたのは、こちらの想像の範疇を越えていて、興味深い行動であった。しかしながら裏を返すと、身近な音への興味があまりないということになるのかもしれない。このように幼児期には、対象年齢によりかなりの差があるので、実践計画を立てる際には、幼児の発達段階を考慮する必要があると考えられる。

音の違いと音高を感じる実践においては、「音当てクイズ」として、どちらの実践に関しても楽しんでいた様子であった。こちらが、当たっているかいないかということをあまり重要視していないため、私が「音当てクイズ」を一人ひとり別の部屋で行うときは、正誤を子どもには伝えていない。当たっていなくても、本人は合っていると勘違いして楽しんでいるのであろうと担任の保育士は言っていたのだが、「音で遊ぶ」という活動に興味をもって取り組んでくれたことは確かである。しかし、半音を聴き分けるというのはかなり難しいことだということは実践から伺えた。おそらく、細かく刻んだ音程や半音に関しては、「音当てクイズ」として行うだけではなく、声を使って音程を近づけるような実践や、歌で階名唱を行う実践で体験させる方が理解しやすいのかもしれない。

一般的に幼児の聴覚が一番発達するのは3～4歳であり、その時期に音感の教育をすると、ほとんどの幼児に絶対音感をつけることができると言われている。しかし筆者は、音楽を勉強する、または楽しむために絶対音感はずしも必要であるとは思わない。先にも紹介した村山和が、音感や演奏技術の面より、音楽的感受性の方が、音楽を学ぶためには

必要と言っているように、子どもが音に興味をもつことによって養われる、音楽的感性を伸ばす実践、音を聴き感じとることができる実践に重きを置くことが大切なのではないのだろうか。

実際、この「音当てクイズ」の実践を行ったおかげなのか、子どもたちの歌の音程が揃うようになったと感じるようになった。それは、もしかしたら音程がわかっているわけではなく、ただ単に周りの音に反応できるようになった、同じ音高なのかそうでないのかがなんとなく理解できるようになったからかもしれない。

子どもたちの歌っている歌は現代のポップスで、リズムも音程も難しく、歌っている子どもたちも、自分たちの聞き覚えで歌っている上に自分たちの声域からかなりかけ離れていたため、音程が非常に怪しかった。これでは困るということで、2週間前に移調した楽譜を渡し、練習を行ってもらった。そして2週間後に聴かせてもらったときに、あまりにも音程がきちんと揃っていて美しかったので、担任の保育者に、この2週間、どのような状況だったかを尋ねると、その保育者も、子どもたちが移調にも何の違和感もなく歌うことができたことに驚いたという感想を漏らしていた。

大まかな音高がわかるようになり、次第に細かな音程に慣れていく、おそらくそれは歌を歌う事であったり、楽器を演奏することに繋がっていくのではないだろうか。

そして最後の音を作り出し探し出す実践においては、子どもたちの想像力や創造力の可能性を感じた。最初は手順がわからず、おそろおそろ回答していた子どもたちが、最後には同じ絵から違う音を探し出し、それをみんなで認め合うといった活動にまで広げることができたのは、思わぬ収穫であったと思う。

以上のことから考えると、この時期の子どもたちには、歌を歌うことと楽器を演奏することのみを実践するだけではなく、音を聴くことに特化した様々な音でのあそびを通じて、「音を聴く」ことや「感性を育てる」ことにもっと時間を割くことが必要なのではないのだろうか。そうすれば、様々な音に興味を持ち、その音をどのように表現し、楽しむことができるか、そしてこちらが指示しなくても、音程が外れていることに自ら気づき、修正することができるであろう。

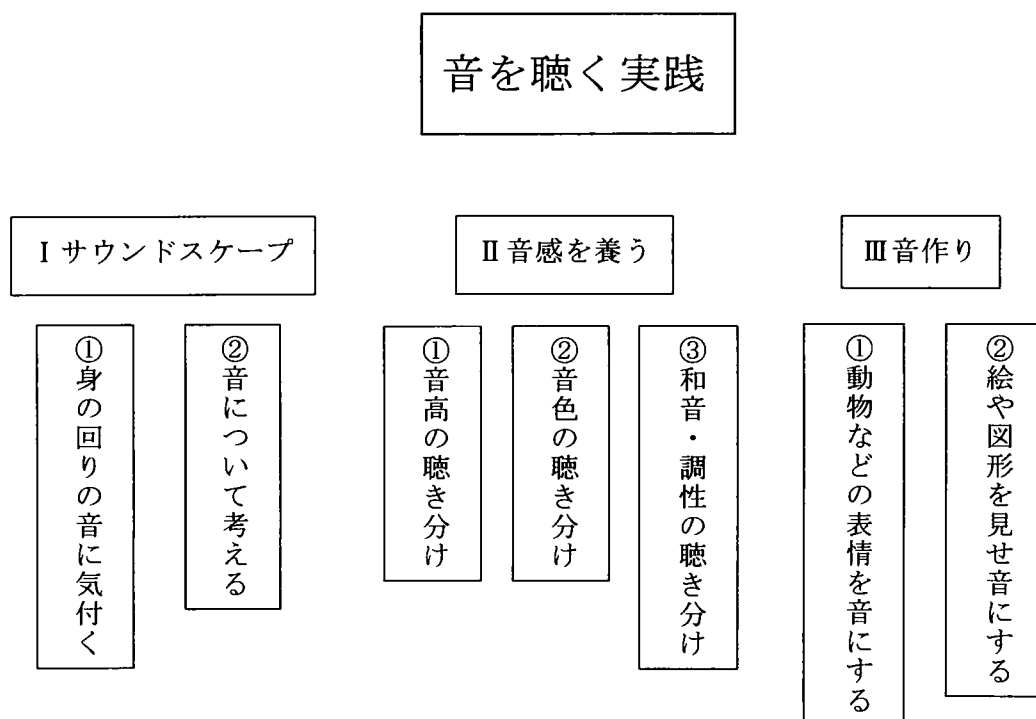
例えばこの保育園では、1歳児から3歳児までの3年間は、2週間に1度、リトミックの時間を設けているので、4月に1度見学し、毎回の活動記録を確認することにした。その中での活動で、子どもたち全員で音を自由に出しているときに、先生が踏切の音を演奏したら音を止めたり、車を運転して買い物に出かけ、駐車場に止める様子を音やリズムで表現するなど、身近な生活の規律を組み込んだ音遊びを行っていた。このような方法を応

用して、ある生活の1シーンを切り出して音だけで表現してみるとか、動物の鳴き声を使ってどんな気持ちなのか想像し、声色や音色などの表現に結びつけるなどの活動に広げられるのではないだろうか。

筆者が子どものころを振り返ってみると、昔遊びの<かごめかごめ>や<ハンカチ落とし>、<鬼さんこちら>などは、目をつむって、もしくは後ろを向いているため、聴くことに特化した遊びとなっている。現在のように、イヤホンで周りの不必要な音をシャットアウトして音楽を聴くこともなく、自分の世界に入り込んでゲームをすることもなかった。たくさんの音の中から、自分にとって必要な音を聴き出したり、周りの音に耳を傾けることが自然な時代だったと思う。このような体験が音楽の聴取にどのように影響してくるのか、具体的な研究結果が見当たらないのでわからないが、現代のように音に鈍感になっている環境は、音楽にとっては憂うべき状況なのではないだろうか。身の回りに様々な音、特に電子音が溢れている現代においては、ある特定の音を聴き取る、また音のニュアンスを聴きわかる耳は確実に鈍ってきていると言えるだろう。人が身体を動かすことによって体を鍛えることと同じく、音を聴くことによって耳を鍛える必要があるのではないだろうか。教育現場において、この「音を聴く」という視点がもっとクローズアップされても良い時代がきているのではないかと筆者は考える。

第2節 今後の音楽活動への応用

筆者は今回3つの視点から授業実践を行った。一つは身近にある音を聴く実践(サウンドスケープ)、一つは音の違いと音高を感じる実践(音感を養う)、もう一つは音を作り出し探し出す実践(音作り)である。これらの実践により、子どもたちの音に対する感性をある程度引き出すことができた実感している。最後にまとめとして、この3つの柱の下にいくつかの実践例を提案してみたい。



I. サウンドスケープ

ここでは、改めて子どもたちが身の回りにある音に注意を向ける習慣を作ることと、そこから発展して音について考える訓練を目的としている。サウンドスケープ提唱者のシェーファーによる『サウンドエデュケーション』および『リトルサウンドエデュケーション』に依っている。

I - ① 身の回りの音に気づく

今回実践したように、身近な音を聴いて擬音語で表現したり、楽器で表現してみる。表現することを目的とするのではなく、身の回りにどのような音があるのかをみんなで共有

できると良い。

- ・身近な生活風景の中にある音

ある日常の風景，例えば朝ごはんの場面，お風呂の場面などをグループごとに音だけを使って表現してみる。ただ表現にとどまるだけではなく，それが他のグループの人達に理解してもらうことができるかというゲームなどにすると，子どもたちが興味を持って取り組むことができると思われる。

- ・戸外にあるサウンドへの気づき

散歩に出かけたり，遠足に出かけたりした時に見つけた音を園に持ち帰って，楽器や声で表現してみる。また，シェーファーのサウンドエデュケーションにあるように，大きな音，小さな音，好きな音，嫌いな音をそれぞれ見つけるなどの活動により，様々な音への気づきが得られるであろう。

- ・日本の昔遊び

以下のような昔遊びは，今の子どもたちは行っていないように思われる。単純なものであるが，サウンドスケープ的な要素が多く，遊びの中で音を集中して聴く力がつものと思われる。

- ＜鬼さんこちら＞

目隠しをして手を叩く音に導かれる遊び。音を聴くことに集中しなければ，動くことができない。

- ＜ハンカチ落とし＞

輪になって座り，鬼になった人がその輪の外を回って，次の鬼になる人の後ろにハンカチを落とす。落とされたことに気づいた人は，そのハンカチを持って，輪を回って先ほどと同じように次の人の後ろにハンカチを落とす。最初の鬼は自分がハンカチを落とした人が座っていたところに座る。もし，その人が気づかず，座っていたらその人の肩を叩いて，その人は負けとなる。人が動いている気配や音，またそういった中でハンカチが落ちる音を感じ取らなければならない

- ＜かごめかごめ＞

一人が目隠しをして座り，その周りを「かごめかごめ かごのなかのとりは いついつでやる よあけのぼんに つるとかめがすべった うしろのしょうめんだ一れ」と歌いながら回る。そしてその歌が終わった時，座っている人の後ろにきた人の名前を当てる。それぞれの友達の声を集めて聴き分けることが必要になる

<だるまさんがころんだ>

鬼が背中を向けて「だるまさんがころんだ」と言い振り返る。背中をを向けている間にほかの人たちは、後ろから鬼に近づく。鬼が振り返った時に動いている人は、鬼に捕まえられるが、捕まえられていない人が捕まらないように鬼に近づき、捕まっている人を逃がすことができる。この遊びも、鬼が近づいてくる人の気配や音を集中して聴くことができないといけないものである

<鬼ごっこ・かくれんぼ>

一番単純な昔遊びである。鬼を決めて、鬼が数を数えている間にほかの人は隠れる。鬼に見つかったら、次の鬼候補となる。鬼はできるだけたくさんの人を見つけるようにする。鬼は隠れている人の気配や音を聴き逃さないようにしなければならないし、隠れている人も鬼が探している気配や音を感じて、うまく隠れなければいけない。

・子どもたちの知らない音を聴かせてみる

現在ではほとんど聴かれなくなってしまった音を聴く活動として、例えば豆腐売りのラッパ、チャルメラ、拍子木の音を聴かせたり、特殊な場所に行かなければ聴くことのできない音を聴く活動として、例えば鹿威し、水琴窟、滝の音、地鳴りの音を聴かせる。その活動の後、どのようなことを感じるか、自身の周りにその代わりとなる音があるかどうかを尋ねてみることによって、子どもたちの音の引き出しを広げ、想像力を豊かにすることができる。

I - ② 音について考える

実際にその場で聴いている音ではなく、音を想像する活動。

・音の違いについて考える

いろんな足音の擬音語を出す活動として、象や猫、ニワトリや馬などの足音を出してみる。同じ足音という言葉であるが音が全く違うことに気付かせる。また、子どもたちの年齢が高ければ、どのような違いがそこにあるのかも答えさせてみる。また同じ人間の足音でも、階段を昇り降りしている場所に行き、昇っている音と降りている音に違いがあるのか、その違いはどんなものなのかをみんなで話し合ってみることもできる。

・声色を使って様々な人の抑揚を感じる

一つのフレーズ、例えば「おはよう」や「こんにちは」などの言葉を色々な人間の抑揚で話してみる。一番身近な家族の声、お父さんの声、お母さんの声、おばあさんの声、おじいさんの声、お兄さんの声などがわかりやすいのではないと思われる。

・音日記

一日の生活の中での音を振り返る活動もある。朝起きて一番最初に聞いた音，今日聴いた中で一番大きかった音，一番好きだった音などを挙げさせる。このようなことを毎日繰り返すことにより，子どもたちが音に対して注意を払うように導く。

II. 音感を養う

音感に関する日々の訓練である。筆者の実践でも子どもたちは音色や音高の正答率が上がった，歌う時の音程が正確になるなどの上達が見られた。こういった活動を継続して行うことによって，基本的な音感教育ができると考える。

II - ① 音高の聴き分け

・音程のない音高の聴き分け

今回の実践でも行ったような単純な楽器，マラカス，ウッドブロック，太鼓のようなもので音高の聴き分けを行う。

・音程のある音高の聴き分け

音程のない音高の聴き分けに慣れてくれば，音程のある楽器，ハンドベル，トーンチャイムなどで行う。最初は広い音程間隔で行う。今回の実践でも3度の音程は，比較的にはやく慣れたので，もっと慣れてくれば2度や半音にも挑戦してみると良いと思われる。

II - ② 音色の聴き分け

素材によって音色が異なることを知る。

・楽器を使う活動

打楽器であれば，膜質打楽器，木質打楽器，金属打楽器などの違いがある。また，今回の実践で行ったように，マレットや奏法によって音色が変わるということも，子どもたちにとっては，興味の湧く実践であったように思われる。

・楽器以外のものを使う活動

紙の音，布の音，プラスチックの音，ガラスの音などで違いを聴き分ける。

また同じ紙の音でも，コピー用紙，画用紙，厚紙，段ボールなど，厚みによっても全く異なる音が出るため，様々な音色の聴き分けの実践ができると考えられる。

Ⅱ - ③ 和音・調性の聴き分け

音楽には和音や調性がある。これらを聴き分けるのは、幼児には難しい課題であると思われるため、今回実践は行わなかったが、もう少し年齢が上がり、小学生くらいになれば、聴き分けの実践ができるであろう。

・和音の聴き分け

長三和音、短三和音の響きの違いを聴き分けさせることから始め、それぞれがどんな気持ちかを問うことも可能であると思われる。しかし、単純に長三和音が明るく、短三和音が暗いとは断定できない。子どもたちに先入観を持たせることは避ける方が望ましいと考えるため、ここでは種類を聴き分けることのみに留めたい。

・調性の聴き分け

単純で、みんなが知っている曲を様々な調性で演奏する。例えば、きらきら星をハ長調、ニ長調、イ長調などで演奏してみて聴き分けさせたり、自分の一番好きな調性のきらきら星はどれかを答えさせたりして試みることができるであろう。また、調性によって、どのような感じがするのかを答えさせることもできると思われる。

Ⅲ. 音づくり

図形や表情からヒントを得て、子どもたちが音を作り出す活動。音色・音の強弱に対する様々な違いを感じ取り、豊かな表現ができる能力を養う。また、一つの楽器から色々な音色が出せることも学習することができる。

Ⅲ - ① 表情・気持ちを音にする

・表情を表現する(視覚的なもの)

ここでは動物の表情を使う。子どもに、怒っている様子、悲しんでいる様子、楽しんでいる様子などの動物の表情の絵を見せ、オノマトペで鳴きまねをさせてみる。続いて指導者がその声を楽器で表現し、ふさわしい表現かどうかを判断してもらう。また、子どもにも簡単な楽器(カスタネットやタンバリン)を持たせ、動物の表情から鳴きまねして楽器で表現させてみる。

・気持ちを表現する(内面的なもの)

また少し難しくなると思うが、言葉を使わず、音のみでコミュニケーションをとる試みもできる。全員が同じ「楽しい」気持ちで音のみで会話する。反対に「悲しい」気持ちの集団や、様々な気持ちを持つ人の集団に発展させることもできる。今の気持ちを音だけで表

してみるのである。怒っているような音，悲しんでいるような音，楽しんでいる音などが表現できる。

Ⅲ - ② 絵や図形を音にする

・簡単な図形を表現する

丸や三角，ギザギザなど簡単な図形を見せ，「この絵が音だったらどんな音がするかな？」と子どもたちの感じるままの音を出させてみる。手拍子や声など，子どもの体から出せる音で表現させ，その後，紙や楽器や身の回りのもので音を作り出してみる。

・風景画や静物画を表現する

図形を表現することに少し慣れてきたら，風景画や静物画などを見せて，そのイメージでの音作りに挑戦してみる。

・絵本を使って効果音を作ってみる

子どもたちが好きな絵本の読み聞かせをしながら，それぞれの場面の効果音づくりの活動をすることもできる。擬音語ばかりを集めた絵本もあり，保育者がその擬音語をニュアンス豊かに読み聞かせたり，子どもたちに読ませたりする活動を行うことによって，子どもたちは音色の可能性をもっと身近に体験することができるだろう。年齢が高ければ，なぜそのような音になったか，その音になる気持ちを抱いたかも答えさせてみると面白いのではないだろうか。

・音と絵の即興表現

以上のような活動に慣れてくれば，絵や図形から音を作ること，音を聴きながら自由に絵を描いたり，音のイメージに沿って色を塗ったりということもできるであろう。

まとめ

この研究は、幼児教育の音楽指導の内容やレベルが、担当の保育士や先生の音楽的素養や好き嫌いにより左右され、先生方にも音楽指導の準備に割ける時間が限られているという現状の中で、どのようにすれば保育士の先生方の負担を少なくし、子どもたちはより一層音楽を楽しむことができるのか、また、なおかつ子どもたちの音楽的能力を高めることはできないものかという思いから始まった研究なのであるが、「幼児・音楽」というキーワードで研究を進めていくと、歌唱指導や保育士のピアノ技術についての研究はたくさんあるのだが、「聴く」ということに着目しているものが少ないということに驚いた。しかしながら、その数少ない資料を読み進めていくにつけ、音楽は技術ではなく、音を聴くということがどれほど大切なことであるか、またこの音の溢れている現代において、いかに難しいことであるかを痛感することになった。

「音を聴く」というキーワードは、この実践結果や先行研究によって触発され、筆者自身の幼児の音楽教育以外の活動においても活用しているのだが、このようにあまり一般的でないというのは、「音を聴く」ということはあまりにも受身で、とりたてて意識をしていない状態での行動であるために気に留めることが少ないということが一番の問題点なのであろう。

サウンドスケープという考え方は、マリー・シェーフアーが 30 年ほど前に提唱した。筆者自身も大学の講義などでその言葉を耳にすることはあったし、実際サウンドスケープの採集に出たこともあった。とはいっても、当時はその深い内容に触れることなく、サウンドスケープというのは、「自身の身の回りの音に耳を傾けること」というくらいの認識であった。しかしながら、今田匡彦は、マリー・シェーフアーがサウンドスケープを提唱した理由に、作曲家は、自身の周りにある音からインスピレーションを受けて作曲するが、当時、彼の周りには騒音の問題が多くあり、彼自身がインスパイアされるような音がなかった。その改善のため、昔の作曲家が聴いていたであろう音や、インスピレーションを促す音を何とか取り戻すため、サウンドスケープを提唱したのであろうと分析している。

その後、シェーフアーがサウンドスケープを教育に取り入れたのは、20 年ほど前になるのであるが、音楽教育の現場でサウンドスケープがそれほど定着していない理由は、サウンドスケープを音楽教育として実践することによって得られる効果がはっきりしないこと、またサウンドスケープの実践から音楽へ導くことが難しいということなどがあるからなのではないだろうか。

しかし、今回のどの授業実践に関しても、子どもたちはもちろん、保育士の先生も楽し

んで参加してくれた。また、「音を聴く」ということに重点を置いていたためと、対象が幼児ということもあり、その後どのように音楽に繋げるかということに関してはそれほど考慮には入れていなかったのであるが、思いがけず、歌の時の音程が揃うようになったり、子どもたちが太鼓のチューニングに違和感を持つようになってきたりと、興味深い結果を得ることができた。

おそらくほとんどの実践に関しての結果が出るのは、もっと先になるのであらうと思われる。また、それぞれの実践に適切な年齢というものもあると考えられるし、もっと発展させたものも効果的であると思われる。その件については、第3章の第2節に示したが、筆者自身も引き続き、色々な実践を重ねていきたいと考えている。

最近、除夜の鐘が騒音と捉えられて、除夜の鐘を打つのをやめたという話題がニュースで取り上げられていた。もしかするとあと20年後には除夜の鐘は、限られた寺院で打たれるだけの特殊な音になる時代が来るのかもしれない。この問題は、ただ単なる騒音の問題以外のものもたくさん抱えていて、解決が難しいものだと思う。しかし、幼少の頃より「音を聴く」という訓練を行っていれば、自分にとって必要な音、必要でない音を区別し、選択して聴くことができるようになるのではないのだろうか。そして、音楽の素材としての「音」にもっと興味を持ち、その素材を使った「音楽」という料理を様々なジャンルで楽しむことができると考えられるのではないか。そのような経験を楽しんで行えるような実践方法の考案や、実践の提案を今後も積極的に行い、子どもたちの音楽活動の一助になれば、もっと充実した音楽教育につながるに違いない。

資料 1

1、どちらの園に勤務されていますか？またどれくらいの頻度で指導されていますか？

- ① 週2回以上 ② 週1回 ③ 隔週 ④ 月1回 ⑤ 学期ごとに数回
⑥ イベントごと ⑦ その他

① 歌唱指導 ② 器楽指導 ③ オルフ音楽教育 ④ マーチング・ドリル ⑤ リトミック
⑥ その他【 】

-54-

資料 2

幼/保	頻度	指導内容	園にお願いしていること	歌唱指導について	その他指導
幼	その他	歌唱指導 器楽指導	安全(台に乗る・搬の扱い)・楽器を大切にする・最低限の協調性(合奏が成り立つように)・ピアノ伴奏の練習(テンポキープや和音)	幼児にでもわかる言葉での指導・幼児の理解度を質問で判断する・良い例良くない例を見せて幼児に考えさせる・少人数で歌わせ、色々なことを気づかせる・大きな声とどなり声の違いの指導	曲の指導にはいろいろな約束事があるので、音楽嫌い・楽器嫌いにならないように自由に楽器に触れる時間を作っている。
幼・保	学期ごとに数回	器楽合奏	演奏する音(階名やリズム)を声に出して歌う・指導者は園児が演奏する楽器を事前に習得しておく。		
幼・保	隔週	器楽指導 マーチング・ドリル リトミック	自主性を持っていただく	大声を求めない・自分で歌えるように	
幼	週 1/ イベントごと	器楽指導 リトミック			
幼	週 1/ イベントごと	器楽指導 リトミック			

幼/保	頻度	指導内容	園にお願いしていること	歌唱指導について	その他指導
幼	週 1	歌唱指導 リトミック		昔からの歌も大切にしつつ新しい歌の情報も仕入れるように心がける	
幼・保	園によって様々	歌唱指導 器楽指導 マーチング・ドリル	次回の指導日までに内容の復習をしておく・毎日数分でもいいので続けるように	選曲の仕方・ピアノ伴奏(テンポやペダルの使い方)・音程を取るための練習曲を取り入れる	器楽合奏やマーチングで使用する楽器選びのアドバイス・バランスの取れた楽器の数や種類のアドバイス
幼・保	週 1	歌唱指導 器楽指導	園児が音楽嫌いにならないこと・音楽を通して生活の基礎をしっかりと身に付けること・共に築き上げた喜びと達成感を味わってもらうこと	大きな声を出すができること・口は大きく言葉をはっきり・もともと表情豊かに	楽器の配置(先生がピアノを弾きながら園児の顔が見えるように)・教室から外が見えないように楽器の位置を工夫する(集中できるように)
幼	週 1	歌唱指導 器楽指導 リトミック		正しい歌詞をきちんと発音して覚える・長く歌い継がれている歌を歌うように	音楽指導が決して訓練にならないように音楽を楽しむスタンスで続けるように

資料 3

保育音楽指導の実態調査アンケート

1、日常の音楽指導において困っていることはありますか？(複数回答可)

- ① 歌唱指導 ② ピアノ・エレクトーン ③ 楽器指導 ④ リトミック ⑤ オルフ教育
⑥ 特になし ⑦ その他 具体的に

2、①～⑤の回答の方、どのようにすれば改善できると思われますか？(複数回答可)

- ① 練習時間を増やす ② 知識を増やす ③ 楽譜を読めるようにする ④ 基本的に音楽が苦手
⑤ わからない ⑥ その他

3、普段よく指導される以下の音楽のピアノ伴奏について

I おもちゃのチャチャチャ

- ① 困っている 具体的にどのような部分が
② 困っていない、もしくは困らなくなった

II 犬のおまわりさん

- ① 困っている 具体的にどのような部分が
② 困っていない、もしくは困らなくなった

III アイアイ

- ① 困っている 具体的にどのような部分が
② 困っていない、もしくは困らなくなった

IV 手のひらを太陽に

- ① 困っている 具体的にどのような部分が
② 困っていない、もしくは困らなくなった

資料 4

家庭での音楽活動の実態

クラス名 _____ 園児名 _____

1、音楽教室、個人の音楽教室(ピアノなど)、リトミックのグループなどを受講していますか？

は い (具体的に _____) い い え

2、家庭でテレビ、オーディオを使つての音楽視聴を頻繁にしていますか？

は い (具体的に _____) い い え

3、家族や近親者の中に定期的に音楽活動を行っている方がいらっしゃいますか？

は い (具体的に _____) い い え

ありがとうございました

資料 5

家庭での音楽環境アンケート結果 (和歌山 T 保育園)									
	全て Yes	講座 のみ	講座・視 聴	視聴 のみ	講座・環 境	視聴・環 境	環境 のみ	全て No	
0～1 歳児	0	0	0	1 (8%)	0	2 (17%)	4 (33%)	5 (42%)	12
2 歳児	0	0	0	4 (31%)	0	3 (23%)	1 (8%)	5 (38%)	13
3 歳児	0	0	0	4 (31%)	0	1 (8%)	0	8 (61%)	13
4 歳児	1 (6%)	1 (6%)	1 (6%)	5 (32%)	1 (6%)	0	1 (6%)	6 (38%)	16
5 歳児	1 (6%)	1 (6%)	1 (6%)	1 (6%)	1 (6%)	1 (6%)	3 (17%)	8 (47%)	17

参考・引用文献(五十音順)

【文献】

- 今田匡彦 『哲学音楽論 音楽教育とサウンドスケープ』 恒星社厚生閣 2015
- 岩田誠 『脳と音楽』 メディカルレビュー社 2001
- 岡田暁生 『音楽の聴き方』 中央公論社 2009
- 北村音壺ほか 『音の感性を育てる 聴能形成の理論と実際』 音楽之友社 1996
- 篠原佳年 『聴覚脳―耳を変えれば人生が変わる―』 きこ書房 2003
- 高橋好子・多和はる 『音楽をたのしむ子どもたち 保育と音楽表現活動』 (株)文化書房博文社 1992
- トレヴァー・ウィシャート 訳 坪能由紀子・若尾裕 『音あそびするものよっといで』 音楽之友社 2012
- 服部公一 『あなたとくらしと音楽と』 日本放送出版協会 1970
- 鳥越けい子 『サウンドスケープ その思想と実践』 鹿島出版会 1997
- R.マリー・シェーファー・今田匡彦 『音さがしの本 リトルサウンドエデュケーション』 春秋社 1996
- R.マリー・シェーファー 訳 鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦 『サウンドエデュケーション』 春秋社 1992
- R.マリー・シェーファー 訳 鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕 『世界の調律―サウンドスケープとはなにか―』 平凡社 1986
- 吉井妙子 『音楽は心と脳を育てていた』 日経 BP 社 2015

【論文】

- 飯塚(小山)朝子 「乳幼児期におけるコミュニケーションとしての音楽表現」『日本保育学会大会研究論文集(50)、(51)、(52)、(54)』
- 井戸和秀 「幼児の音楽教育における今日的課題」『岡山大学教育学部研究集録 (77)』
- 伊藤 真 「幼児の音楽的能力の育成に関する基礎的研究(1)」『広島大学学部・附属学校共同研究機構学部・附属学校共同研究紀要 (39)』
- 榎内光子・立本千津子 「保育音楽の現場実践力の向上を目指して」『徳島文理大学研究紀要 80』
- 大愛崇晴 「トマス・ウィリスの「音楽的な耳」と音楽の快の知覚」『美学会 美学 63(1)』
- 大沢明美 「幼児期における音楽的刺激による共感覚」『日本保育学会大会研究論文集 (42)』

- 大野恵美・赤井裕美 「保育現場の音楽表現活動の実態と短大教育の在り方に関する研究」『湖北短期大学湘北紀要 34』
- 岡部裕美 「音楽表現におけるリトミックの実践～身体を楽器にした音楽表現を中心に～」『千葉大学教育学部研究紀要 57』
- 岡本拓子 「「聴く」ことから始まる音環境への関心—保育者・教員養成校における「音日記」の実践—」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要 17』
- 奥水智津子 「幼児期の音楽教育」『日本大学教育学会教育學雑誌 (14)』
- 鍵渡有華 「乳幼児期における音楽の基礎的能力に関する研究」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要 9,』
- 鍛冶礼子 「幼児の歌唱指導についての一考察」『千葉大学教育学部研究紀要 54』
- 角田忠信 「日本人の脳機能のユニークさと文化」『テレビジョン学会誌 32(6)』
- 紙屋信義・後藤みゆき 「ピアノによる子どもの歌伴奏の効果」『東京未来大学研究紀要 1』
- 川瀬良美 「幼児期の社会性の発達と保育」『日本保育学会大会研究論文集 (49)』
- 北村恵子・平澤節子 「幼児の音楽指導に関する研究」『上田女子短期大学紀要 28』
- 黒田ひとみ 「音に対する感性を生かした授業—「心の耳で聴く世界」の授業実践と分析を通して」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要 8』
- 小池美知子 「保育者の音楽的感性が幼児の音楽表現に及ぼす影響」『日本保育学会保育学研究 47(2)』
- 酒井貴 「幼児の歌におけるピアノ伴奏法について」『聖霊女子短期大学紀要 36』
- 坂本暁美 「領域「表現」で音楽が育む感性—感性を高めるために保育者が行っている働きかけ—」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要 15』
- 作野理恵 「ドイツの幼児・初等教育で使用する音楽教材の分析と考察」『大阪芸術大学短期大学部紀要 (29)』
- 佐藤治子 「早期音楽教育におけるソルフェージュ」『滋賀大学教育学部紀要. 人文科学・社会科学・教育科学 19』
- 志澤 彰 「ハンガリーの「音楽小学校」の音楽教育」『国士館大学文学部人文学会紀要 (34)』
- 進藤務子 「心をはぐくむ幼児音楽教育—第 1 章『創造性と幼児音楽教育』—」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第 33 号』

- 進藤務子 「心をはぐくむ幼児音楽教育—第2章「子どもの感性と音楽の精神世界」—」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第35号』
- 鈴木慎一郎 「佐藤吉五郎による幼児への和音感教育実践」『白梅学園大学・短期大学紀要 48』
- 高野 茂 「人間の聴覚と音楽」『佐賀大学研究論文集 42(2)』
- 武田道子 「幼児の歌唱指導」『静岡大学教育学部研究報告・教科教育学篇 11』
- 田原昌子 「フィンランドの音楽教育Ⅱ—小学校音楽科教材に関する考察1—」『プール学院大学研究紀要 51』
- 田原昌子 「フィンランドの音楽教育Ⅱ—小学校音楽科教材に関する考察2—」『プール学院大学研究紀要 52』
- 田原昌子 「我が国の音楽科教育法に関する研究Ⅰ—「聴く耳」を育む音楽科教育法—フィンランドとの比較研究」『プール学院大学研究紀要 53』
- 田原昌子 「我が国の音楽科教育法に関する研究Ⅱ—「聴く耳」を育む音楽科教育法—フィンランドとの比較研究」『プール学院大学研究紀要 53』
- 田原昌子 「子どもの表現のためのピアノ伴奏法Ⅰ—初級者を対象としたピアノ伴奏力養成について—」『プール学院大学研究紀要 55』
- 玉置温子 「保育音楽におけるソルフェージュの役割」『大阪社会事業短期大学社会問題研究会社会問題研究 18(1)』
- 玉置温子 「音楽をきく—音楽教育の立場から—」『社会問題研究 30(2～4)』
- 土田定克 「「優しさ」を支える「心の強さ」～現代日本の幼児教育と木下式音感教育法～」『尚絅学院大学紀要 (60)』
- 戸川晃子 「クラシック音楽の生演奏が未就学児に与える影響についての考察」『神戸常盤大学紀要 (6)』
- 中西智子 「音楽リズムは「からだ・こえ・おと・タイミング・ことば・リズム・おんがく」と「視覚」の総称」『「日本子ども学会」事務局 チャイルド・サイエンス 5』
- 島澤 郎 「日本と海外における音楽教育の比較研究」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 16』
- 深見友紀子・富田芳正 「電子キーボードを活用した幼児の音楽セッションに関する研究」『京都女子大学発達教育学部紀要 2』
- 藤田芙美子 「言葉を動作を音楽的にまとめる—保育園1歳児クラスの子どもたちの音楽行動の観察記録から」『日本保育学会大会研究論文集 (53), (55)』

- 松本俊穂 「ピアノ初学者の基礎技術習得の実態とコンピュータシステムによる CAI 学習法の現状と課題」『長崎純心大学・長崎純心大学短期大学部幼児教育．特別号 2001』
- 松本俊穂 「幼稚園・保育園におけるピアノ・オルガン、弾き歌いに関する現状と課題」『長崎純心大学・長崎純心大学短期大学部幼児教育．特別号 2001』
- 松本晴子 「史的変遷からみる幼児教育における音楽活動の特徴」『宮城学院女子大学発達科学研究 (12)』
- 水野侑子 「幼児期における音楽的発達に関する一考察」『学校音楽教育研究：日本学校音楽教育実践学会紀要 9』
- 村上玲子 「幼児期における音楽活動と身体の動きについて」『日本保育学会大会研究論文集 (40)』
- 村山 和 「幼児の音楽教育、特に音感教育について」『札幌大谷短期大学紀要 5』
- 門奈由子 「スズキ・メソッドとヤマハ・システムにみる戦後の「民間音楽教育」」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要 13』
- 山崎誠之 「実践的音感教育論」『長崎大学教育学部人文科学研究報告, 21』
- 若山剛・細田淳子 「乳幼児期発達の諸相における相互性について」『日本保育学会大会研究論文集 (51)』

【資料】

- 岩手県立総合教育委センター「幼稚園と小学校低学年における音楽的発達を促す指導・援助の在り方に関する研究」
http://www1.iwate-ed.jp/db/db1/ken_data/center/h11_ken/11_13/11_13.html
(2015/10/12 現在)
- 川島千加子 「幼児期におけるソルフェージュ指導とは(対談形式)」
<http://www2.yamaha.co.jp/jet/library/pdf/kawashima.pdf> (2015/12/11 現在)
- 川村光毅 「音楽する脳のダイナミズム」
<http://www.actioforma.net/kokikawa/kokikawa/dynamism/dynamism.html>
(2016/1/7 現在)
- 上村光代 「音楽を愛好する心情を育てるチェコの音楽教育について」
<http://crie.u-gakugei.ac.jp/report/pdf35/> (2015/10/31 現在)
- 天白子ネット 「聞きかじり発達心理学 第3回 子どもの世界観～3歳から5歳ごろ～」
<http://mymimosa.net/tenpaku-konet/pakukko/dp/entry-1691.html> (2016/5/4 現在)

- 楡の会発達研究センター報告 その 22 「子どもの困った行動の解決を目指した関わり方をお教えます～“好い事作り 心理療法”～」
<http://nire.or.jp/wp-content/uploads/2015/12/b7fae666a03f728869ff2d8c4ffe2d01.pdf> (2016/5/4)
- はやし浩司 「子どもを考える」
<http://www2.wbs.ne.jp/~hhayashi/page144.html> (2016/5/4 現在)

謝辞

この研究を行うにあたって、快く授業実践の場を提供してくださった私の勤務園である和歌山の保育園には、心より感謝しております。またアンケートに快く答えてくださった音楽専門指導者の先生方、保育士の先生方、保育園のご父兄の方々のご協力なくしては完成することはできませんでした。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

大学院で学んだ音楽に対する姿勢や教育に対する姿勢、教育者としてのあり方は私にとってとても新鮮で、今まで自身が経験から得ていたものを再構成し、自信を持って今後の指導にあたることができる貴重な体験となりました。また、研究や実践のヒントを雑談に織り交ぜながら私に与えてくださった兵庫教育大学芸術コースの先生方に対して、心より感謝いたします。

そして、至らない私を支えてくれた家族、友人、生徒などのたくさんの人々に深く感謝し、この論文を書くために学んだことを、今後の自身の指導に活かしていけるよう、これからも精進してまいりたいと思っております。

最後に、あまりにも漠然とした私の研究と稚拙な論法に対し、ひとつひとつ丁寧に私の思いを引き出し、また時間に制約のある私のわがままにもお付き合いいただき、温かく見守りながら導いてくださった木下先生には心より御礼申し上げますと同時に、今後もしもご指導いただきますよう、お願い申し上げます。

前 川 典 子

平成 29 年 1 月 10 日